

6184

皮魚坂

白葉



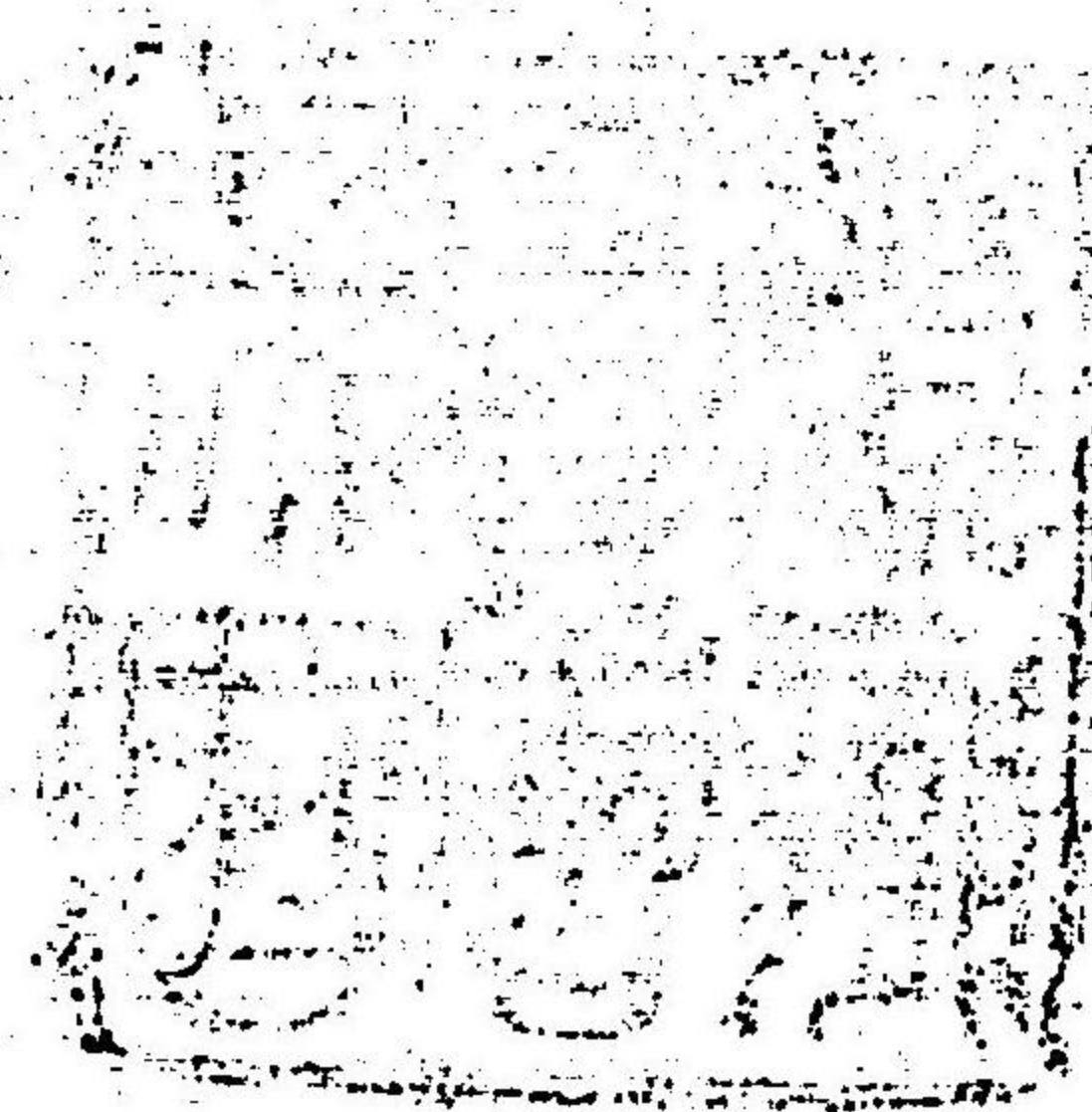
持9  
990

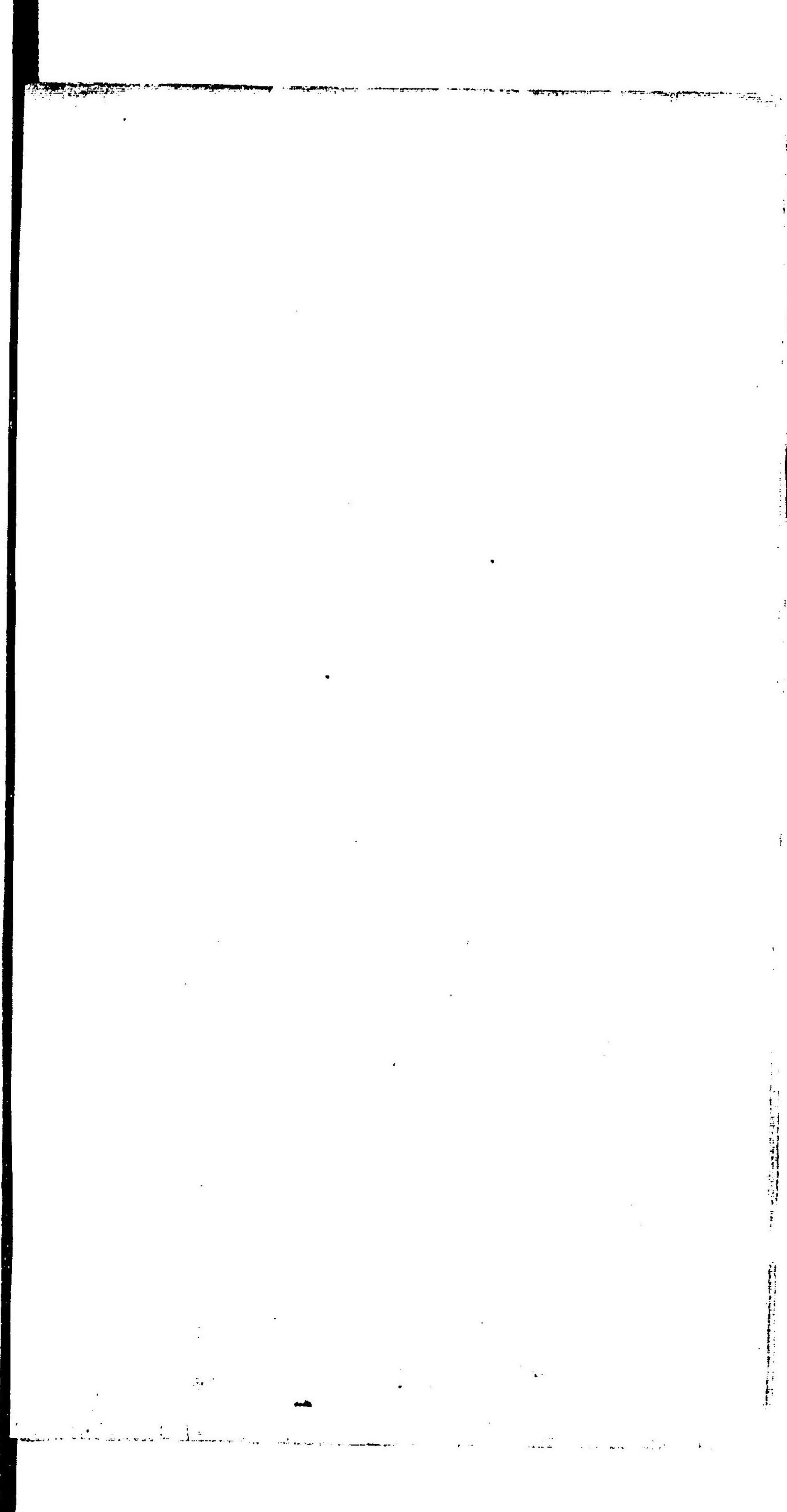


戀

境

明治  
36-12-17  
内交









朱戀境

荷葉

うやきむれつま

この黄昏の小路を豆腐屋は忙しく行亘るのに、誰がすすみか、なほ眞明る  
い頃から、みずきも、で傳はる二調三味線は、差配の棟梁が二階のやうでもな  
し。草鞋、駄菓子賣る店には思ひも寄らぬ事。電話の線の群を外れた一條の  
達する所、倭小した新しい土蔵のある妾宅の、もしやと疑つて見ても、此所  
からでなし。一軒二軒三軒目、それよ川端に出やうとする手前に、冠木門の  
少し古びては居るが、そよとの風にも靡かうとする柳の翠なる、平家造りの  
其の奥にこそ、其の絃の主はあれ。  
長いものが一段済んだ後、二人は思ひくく、まやかくと掻鳴らして居る

ほど、いつともなく四方を見分かぬやうになつて、  
「まあ否だ、私や三味線に夢中になつて、燈を點けるの、すっかり忘れて  
ましたわ。」

薄暗がりに聲はえて、一挺の音のはたと止まれば、まだ閉さぬ縁側の袋戸棚  
から、出す玉火屋の臺洋燈に、燐寸の火の俄に灯る。

「あじまり何も構はないわねえ。お千夏さん、御免なさいよ、ね。」

言つて居る間に元の席の、三味線が巾を取つて横つて、稽古本が算を亂して  
撥袋や、絁箱や、桔梗の紋の附いた本挟みなどが、散らかり放題に散らか  
つて居る中を押分けて、竹細工の洋燈臺毎其所へ持ち運ぶ。

墨は小さげに見えるが八片を敷へ、床には折からなる山間の月の書幅、大切  
なものらしく硝子箱に入れた、友禪の筒袖の人形。到來物と見える枝柿を扱  
込みたる。

其を背にして居るのはお千夏と呼ばれたお客の方で、稍太つて居る爲めに、

引締り勝の黒縮緬の羽織ですら、肩の邊に難は見えるが、濃く艶やかな花月  
巻の、少し立てた前髪に鬘櫛の齒は徹つて、太い眉、圓な眼、花やかに粧ふ  
頬のあたりのふくやかに、殊更無邪氣さを示すはその二腮。

「何言つてるの、私やお浴ちやん、お客様ぢやなくつてよ。」

時れくした調子を早めて、唇の薄いかと見えるほど、可愛らしい口元に笑  
を浮かべる。

「だつて……お客様ぢやありませんか。」

病後のお浴は痛ましままでに脱けた毛を、引詰めて銀杏返し、色はまだ悪い  
が鼻筋の通つた、縁に僅の黒味はあるが眼尻に嬌羞を帯ひて居る。撫肩に掛  
襟の、縫ひ返らしい米硫の裕、黒襦子に紅の少し入つた友禪の晝夜帯、め  
れんすの脊負ひ上げの結び目を、軽く摘まんで見入る様。

「お客様なもんですか……。」

「それぢや、何てす？」

ふと面を揚げてお千夏の顔を覗く。

「何つて……水臭いわねえ、お清ちゃんは。」

怨めしげに見返して、

「私や、此所の内の妹ぢやありませんか。お清ちゃんの妹ぢやありませんか。

お客様ぢやありませんか……ね、ほら、その理由は……ほら、ねえ、

貴女も知つてるわ。」

實に想ひ合はす事!

お千夏は一度好もしてからぬ所へ嫁して、久しく胸に墨んで居た望をば、根か

ら打壊されて仕舞つた爲め、もう活きて居たとして此世に欲しいと思ふものは、

何一つとてなし。折節仲好のお清兄妹にこの事を語つて同情を求めたらば、

二人の上にも亦然るべき仔細あつて、兄の彌三郎は過ぎし失戀に、一旦害つ

た心臓の傷は永久に癒えず、お清も多年の脊髄病に、打惱んで茲に二十二の

今日となつて、到底事の成り遂げられぬ儘に、自から諦めて居る矢先。また

兄妹の家の隣町に繁昌の頃は、さのみに親しくはなかつたものゝ、かうなつて互に語り合へば、事柄こそ變れ三人ながら、同じくこの世に在つて、或る輝いた望を絶つた精神の上の不具揃ひ、三つの片輪の一所になつて、餘處の人には捨てられても、兄弟になつて胸の中の苦を、慰め合ひませうぢやないかと……。

「此間のお話?」

「お話ぢやないわ、三人してちやんと誓つたんぢやありませんか。」

それと心得てお清は僅に微笑む。

「ね、分つたてせう、だから、そんな……構ふの、構はないのなんぞつて、

お客様扱ひは是から御免蒙るのよ。」

「だつても……。」

「だつても、何一寸、何なの?」

「兄様は宿直で居ませんし、お治は使に行つて居て……。」

「あら女中さん、何所かへお使ひにでも遣つたの……？何所へ。」

「可ござんすよ、それは。」

お清は獨り頷く。

「可ござんすつて言ふけどもいけないわよ。何所へお治さんを遣つたのよ。」  
それには答へず。

「私一人になつたもんだから……。」

「それや、私に黙つて女中さんをお使に遣るんてすもの、一人てお清ちゃん  
が困るの、當然だわ。」

優しく嘲るお千夏。

「私一人になつたもんだから、お茶や、甘味くもないお菓子位しか、他に何  
も構はないて居る所へ、何ぼ三味線に實が入つて仕舞つたからつて、眞暗な  
坐敷へ坐らせて……。」

「結構、眞暗、結構、三味線に實の入るのも結構だわ、一寸。さあ、實の入

り序にもう一つ、何かませうぢやないか。」

「さうね……。」

「考へつこなしにませうよ。而してもう、一つ絃ませうよ。」

と再び絃を取上げれば、

「でも……明るい内から絃を始めて、夜になつてもまだ三味線を止さない  
と、彼所の宅ぢや、主人が居ないもんだからつて笑ひますよ。」

「それがいけない、それがいけない。」

と遮つて、

「そんな、そんな事ばかり考へるから、病氣がいつまで経つたつて快くな  
らないんだわ。駄目、駄目、人間てものは鬱ももんぢやないやうに出来上つ  
てるんだわ。さあ、もう一つ何か絃ませうよ。」

お千夏は一切此方に頓着なく身構へして、爪絃に掻き鳴らしながら、通つた  
聲で、



「……いつか逢ふ瀬と谷間なる、緑の色の濃き薄き、蒼も翠も酔葉や」

一寸唱つて、

「よう、何か絃きませうつて事さあ……。」

答の方は極めて間延びが来たが、

「お千夏さん絃くと可わ、何でも……。」

「私に？」

「ええ。」

それとは推しても素知らぬ振のお千夏は、

「ええ絃きませう。私が絃いて、今度はお洛ちやんが唱ふつて、かういふ分

なんてせう。」

わざと其の意に間違へたつもり。

「いこえ、さうぢやなくつてよ。」

此方は慌てて、我が言葉の正しい意味をなほ、明に志たく言解かうとするのを聴かず。

「さあ、お唱ひなさい、何でも。忘れてるものでも、私胡麻化しても絃いて

お目に懸ける。」

言ひつゝ我が面を燈に輝かせて、新に象牙の撥を取るよと見えだが、手早く

腕を甜めて、膝を一層前める。

お洛は怯みながらも、

「さうぢやないんです。私唱はうつてやませせんのだよ。」

「そんなら絃いて私に唱はせるの？」

「さうでもないの……。」

「それぢや矢張、二人して絃いて唱ふの？」

「いこえ、さうでもないのよ。」

「ええ、ま焦れつたいねえ、お洛ちやんは！」

其の權幕の荒けなすには、お清のさすが退避く儘、

「お千夏さん、御免なさいよ。私や、もう終くのは止すんですの……。」

「止すつて言ふの？」

「さうなんですよ……。」

それをなほ強ひても悪いと、お千夏は漸く掉を撥毎、傍へ置いて、

「それぢや止して、お話にまませうか。」

「さうね……お話の方が可ござんすわ。」

『貳』

聞馴れた日和下駄の音が裏口の方に来て、其所の腰障子が開く。

「お治かえ。」

「へえ、どうもお待遠様。」

「遅かつてねえ。」

言ふなりにお清は其處らあたりを取片附ける。

臺所の上草履の運びより、板の間はがたびして、鼠入らずから何かを出し、

蠅帳がさしみ、瀬戸物同士の何かと一寸鉢合をまて、水道がしやあと言ふ。

何か洗つたものもあるらしく、さてはお膳の拵へられた様。

「本當にお治さんを、何所へ使ひに遣つたのよ。」

せつせと稽古本を積んで居るお清を怪しみつゝ。

「好い所へ遣つてたのですよ。」

珍しく笑つて答へる。途端に和田平の重箱を二つ載せた黄地の膳が、赤いむ

つちりとしたお治の手に支へられて、

「さぞ、どうも、お腹がお透きてしたろ。」

と出る。ふと見たお千夏は、

「否だ、く、く。」

駄々つ子のやうに躰を揺つて、

「私、否だわ、お渚ちゃん、こんな事しちゃ。」

「だつて、何もなかつたんですから……。」

と膳を受取る。お千夏は大不平で、  
「黙つてこんな物を取つて仕舞つて。だから先刻から何所へお治さんを遣つたつて、さう言つて聞いてたんだわ。あむまり他人行義過ぎるわ。こんな事するんぢやもう、此間誓つた事は打毀した。」

其誓つた事を下女風情になど聴かれてはと、すばく言ふのを氣遣ふお渚。

「私や病人だから何ですけれども、貴女お腹が空いたでせうと思つて。」

「あら、一寸、私だつて病人だわ。」

「貴女が……。」

言ふお渚よりは、傍て洋燈の心を出して居た女中が、驚いて團栗眼を向ける。

「えともう、大病人。御飯も何も咽喉へは通りやまなすわ。」

「あんな、嘘を仰います。」

お千夏の眞顔が可笑しく、笑ひ轉けるお治。

「あら、お治さんは笑つて失敬だわね。本當よ、お渚ちゃん、貴女も今まで私の病人を知らないでたの、え、一寸。」

「でないもの、私を知つてる分はありませぬわ。」

「さうでせう……さうでせうとも。」

珍しくお千夏は沈んで来て、

「姉さんの貴女も知らない……でせう。私の、私の……。」

其の聲音の何ともしもなく打頭よ。

「私の胸のこの病氣を……知つてくれるものは……この私の胸はつかり……。」

「そんな事は可ござんすから、お上んなささいよ、私も御招伴しますから。」

さるほどに此方も氣を替へ、

「もう是からは、かういふ籠々を致しませんで、其所で謝れば勘忍します。」

「大變むづかしくなりました事。」  
と女中は笑ふ。

「もう屹度……致しませんから、今晚だけは上つて行つて下さいな。」

「大層、真面目に謝るわね。」

とお千夏は笑ひながらも、

「だけでも、お氣の毒だわね。」

「こんな事……位。」

「それぢやまあ、兄さんや姉さんの家だから、遠慮なしに志ませうねえ。」

「どうぞ、お千夏さん、召上つて。」

茶や香の物の世話を治がまて、賑かに夕餉を終る。

「御馳走様ね。」

「どうぞ致しまして、貴女。」

女中の引下つた後。

「序の事、お千夏さん、今夜は淋しいから、泊つて入らつしやれなくつて？」  
「さうね……私も泊つて行きたいんですけども、それだけは出来ないから……。其の代、お邪魔でないのなら、いつまでも居ますから……。」

「あら、いつまでも入らつしやれて？」

此方はそれが楽しく。  
「まあ嬉しい……でも、お宅で阿父様が、お小言を仰るやうな事はないんですか。」

「そんな事はないわ。父は私の事には構はないんですから……。」

「どうしても、お高智さんの方を大事になすつて？」

「はたと想ひ當る所のあるのを、お千夏は色にも出さず。」

「いこえ、そんな事はありやしませんけども……。私は何處へ行つても、少し位遅くなつたつて、父は何とも言ひは去ませんし。それに第一此方へ伺ふと申したら、我家でも屹度長くなると知つてますから、何とも父が言ふ事

ぢやありやしないわ。」

「さうく、阿父様には、私いつ目にも悪つたばかりでせう……さうね、まだ病氣にならない前に、知らずに伺つたら恵比壽講で、あの時上れくと仰つた、あれつきり……。それから直に、こんな病氣になつて仕舞つて……。」

「もうくく、病氣の事は言ひつこなし、私ゆつくりして行きますから、何か面白い話を考ませうよ。」

「本當に、ゆつくりなされるの？」

「本當ですとも……。好い時分には、いつもの小僧が迎へに来ます。それまでは可のよ……。月に二度のお泊せう、淋しいでせう、随分。」

「え、全て先の内の人数とは違ふんですから、どうしてもねえ……。」

だから餘計何か、詰まらない事を考へて……。仕様がなってますの。」

お千夏ははたとお浴の膝を叩いて、

「もう、是から詰まらない事を考へるのは、一切止し。」

「え、もう止すわ。」

「あ止しなさいよ。此間も互に、さういふ事にさやうと言つたぢやありませんか、是までの事なんか、泣いたからつて笑つたからつて、仕様がなつて。もう私達は……。自暴に生きてるばかりなんだわ。」

『自暴に』がその意を得て、あまた、び領……。

「さうねえ……。まあ、さういへば、さういふやうなものですけども……。」

「だからもう、詰まらない事を考へるのはあ止め。」

さすがにお浴から氣を取直して、

「而して迎への小僧さんは、いつ頃来て？」

「九時には來ませう。」

「なら、今……。七時だから、まだ、二時間入らつしやれてね。」

「え……。」

「さう、お迎への小僧さんと言へば、あの、いつだっけかの時、暮方貴女のお迎へに来た、大きい人はどうして？」

「大きい人？」

「あの、二十三とか、四とかだけでも、少し何だか、かう足りないとか何とかでつて、貴女さう仰つた事があつたてせう。」

「あ……、さう……、あれ、あれ。」

お千夏は莞爾と、

「あれはね、店の職人よ。」

言つたが、何を思出してか忽ち吹出す。

「何なんです。」

可笑しさに得堪えて、只管頭を縮めたお千夏は、

「何つたつて、そりや可笑いのよ。彼は店の商品の下職なんですけどもね、

怠惰者で……、それはもうね、お話にならないほどの怠惰者なの。彼の爺つていふのは、まあそれでも士族の片割なんですけども、早く亡つて、二人とかある兄といふのは、腹が縫つて居るもんだから、些だつて世話をまてくれるのぢやなし。さうするとその阿母様といふのが、掌へ丸め込んで居るほど彼を可愛がつて——民つて名なんですから——民や……つて言つて居て、店へなんぞ来やうもんなら、話は民やで持切つてる位なのよ。それほどに思つてる當人は、怠惰けて……、その癖小器用で、すれば日に相應の物は取れるんで居ながら、一日仕事をすると、三日遊ぶといふやうなんで、とても母子で家を持つ事は出来ないもんだから、人の家の二階を借りて居るんですけども。それで民が考へてる事が面白いのよ。

自分は今にえらい、大した職人になります。天子様は日本一で、神様だ。私は神様ぢやないけれども、今は日本一の職人になつて見せまうと言つて、店へ来るとは威張つて居るのよ。それで以て仕事は上げて来ないもんだから、

いつでも番頭やなんぞは笑つて、なるほど名人の職人は勿体振つて恐入る分だが、店の注文物を間に合はしてくれないのは少し困るね。未は日本一の職人になるかどうか知らないが、今店の急ぎの間に合はせてくれない日本一の職人は、どんなえらい腕があつても店て使ふ事が出来ないから、今日限り我家の仕事は断るといふと、それで根が正直だもんだから、泣くのよ。泣いて謝るのよ。もう屹度意気なせんから、仕事を頂かして下さい……。さうかと思ふと三日坊主なんだわ。

而してまあ此頃は餘程可笑いのよ。どうしてそんな事を考へるのだから、店へ来る度に、自分は早く阿袋を安心させる爲に、一つかう女房様を持ちたいんですが、どうでせう……。さうすると店の者は人が悪いから、可からう、民ちゃんや女房様を持つんなら、精々引摺か何かの女を見付けて當かへば、母子夫婦共々始終貧乏な暮しをさせるだらうと言ふと、民は無氣になつて、私はもう、女房を持つたら稼ぎます、屹度稼ぎますと言つて、威張つて居る

のを、聴くともなく私が店へ行く細戸の所で聴いたもんだから、づゝと出て行つて、民ちゃん、お前さんが、お上様を持つたら稼ぐつて言ふんなら私や、お前さんの女房になつて、一苦勞して見たいわつてねえ、まあお渚ちゃん、笑つちやいけないのよ。さう言つたらね、まあどうでせう、極りが悪かつたんでせう、顔を眞赤にまで俯向いて、それからつてものは、私がその人に影を見せると何が怖いんだか、隠れて仕舞ふのよ。此頃はどうしたんだか、民は變ねえつて聞くと、駄目でさあ、あんなぐうたらで、女房様々々て口癖のやうに言つて居ますけれども、どんな酔興なものでも、來手がありやしませんや。さうさねえつて、私も笑つたの。

「さう、そんな面白い人なんですか……？」

「面白いつたつて、貴女、お話にならないほどなのよ。」

お渚は少し考へて、

「呑氣なんですわねえ……。」

と評をする。

「まあ、どうなんだわね。さうしちや、あんな爺むさい形装をきて居て……」

「それで、可愛がつてゐる阿母様てのはどうなんですの？」

「是はまあ、只可愛いが先に立つて、少しそんなに足りないもんだから、不  
愠だ〜と思つて居るんだわ。それだもんだから、お店にも濟まず、自分の  
御膳は喰べられないと言つたやうな風で、意見も通らず、只もう、獨りやき  
もき思つて居るんだわね。」

お落は例の少し俯向いて、

「ですけれども……貴女、可の？そんな、妙な事を仰つたやうですけれど  
も……。」

「何、妙な事つて……あ、一苦勞して見たいつてさう言つた事？」

「え、もしや、そんな……何な人だから、どんな事してまた……。」

お千夏は實にもと考へる所もあつたが、

「可わよ、可わよ。どうせ私は不貞腐なんだわ。だからそんな民となんか、

一苦勞して見るのも、浮世にすねて居て、面白いかも知れないわ。」

早口に言ふ裏に、實は物あり。曉るや曉らざるや、

「あら……！」

と驚いたばかり、お落もさすが言葉はなし。お千夏は、かのふくやかな頬に  
笑んで居る。

『参』

大門通を横に外るれば、貸藏、荷藏ばかり打續いて、晝すら往來の稀な觀光  
新道。その異名の因つて來る所は、この中ほどに正一位觀光稻荷大明神の鎮  
坐ましませばこそ。檜造の社殿粹に小さく、初午の折に提げたる御洗水の掛額  
は、町内の俳諧思想を代表して、細き二本杉にも、夏は時たま氣紛れな蟬の



訪る。

小雨に奉納の提灯破れて、暗れても秋の淋しさを催す霽のほど、十日ばかりの月淡き社前の敷石にまやがんで、親子らしき二人が話す様。

母親と見えたのは、少し腰の弓になつた半纏姿。形ばかりのおばこは六十路ほどの齡か。

「民、お前はまあ、どうしやうつてえ氣なんだねえ。」

さも焦れつたさうに言ふ。

「どうしやうつたつて、仕様がないうぢやないか、阿母様……。」

太い濁つた聲に、答へる民は、五分刈の延びくゝて耳の半蔽ふに、人香のする、薄ぎたない裕形装。

「また、あれだ……！」

と老母は舌打をまて、

「何て言ふと、どうしやうつたつて仕様がないだ、本當に。仕様がないやう

には、一體誰がまたんだよう。」

それにはさすが答へられず、民は黙つて居る。

「本當に、仕様がかりやしない……。今度といふ今度は、もうお店でも構はないと仰つたよ。番頭さんも、もう、一切注文は遣らないからつて、さう仰つたよ……。また私だつても、今度といふ今度は、もう何所へだつても詫びを願ひに行けやしないよ。」

「そりや、さうな……。」

と心得たもので。心得ぬは母親。

「そりや、さうさもないもんだ、本當に。何所へも詫びを願ひに行けなけりや、もう……。お前も阿母様も、腮を釣つて仕舞ふばかしだよ、あ……。」

「さうな……。」

「落着いて居られて溜るもんかね。そりやもう、お前が腮を釣るのは自業自

得とやら、何とやらで、そりやもう仕方がないさ。けれども、お前の唯一人の阿母様は私だよ。私が腮を釣るのを、お前は傍で見ておるてか。見てる事はよもや出来やしない。」

「阿母様……。」

口早に突込ひと、母は何か思案が民の胸に出来たものと思ふため。

「え、何だい……。」

その言葉を待ち構へる。

「阿母様、腮を釣るつて……何の事だい？」

月影に母親の顔を覗く。老母は齒痒さに言葉もないかと思ひの外、

「腮を釣るつてお前、何だね、私達が御膳を喰べる事が出来なくなる事さ。」

「さうか、喰べられなくなるのか、さうか……。」

一向に落着く民を見ては、老母も小焦れつたく、

「喰べられなくなつて可いかえ。」

「阿母様は喰べられるぢやないか……。」

「私？喰べられるもんかね、お前、考へて御覧な。」

「考へて見ても、喰べられるぢやないか。仕事を怠たり、足袋を拵へたりして、今でも喰へて居るぢやないか。」

「え、またお前はそんな事を言ふのかね。」

老母は舌打して、

「私を、幾つだと思つてゐるのだい。」

「六十幾つとか、言ふのさ。」

「さうさ。六十といへば本卦返りと言つて、大家なんぞぢや祝をするのさ。」

本常に……世が世なら……本常に……。」

と口惜しさの涙を袖に押へつ、

「え、それも愚痴だから私には言はない……。けれどもこれ、もう私は六

十一にもなつて、作はあつてもお腹を痛めたのでないもんだから、向ふて世

話をまてくれやしなさい。唯一人の實子の子の、便らうといふ前は……  
こんなく、怠け者……。六十にもなつて賃仕事をして、醒醒して居させ  
るのは、第一實子の子のお前の耻ぢやないか。え、耻とは思はないのかい  
……。」

「そりや耻つて事は、腮を釣る事よか、知つてまざあ……。」

「そんな知つてる耻なら、些は耻を耻と思つたら可ぢやないか。」

「阿母様……。」

「え。」

「耻を耻と思つたつて、矢張、耻は耻ぢやないか。それとも耻つてえもの  
を、どんな耻だと思ふんだい。え、あ、阿母様……。」

腮を釣る傳で、民は心からさう聞いたのを、母親は、又洒落を言つたと思  
ひ違へて、黙つて仕舞つて、咳ばかりして居る。

「え、阿母様……。」

「知らないよ。」

民は例の覗いて、

「怒つたのかい。え、あ、阿母様。耻を耻と思へつたつて……。」

「またも繰返し兼ねないのを。」

「分つたよ、もう……。」

落つる涙を拂つて、

「洒落どころぢやないぢやないか……。」

「え、洒落？何が……。」

案外に驚く民は、團栗眼を月に輝かす。

「私や、もう、齒痒くつて焦れつたくつて、どうしやう事も出来ないよ。人  
様は……人様は、お前の事を、馬鹿だ、足りないと思つて仰る。」

「さうだ、皆さういふね。」

「昔さう言ふと言つたつて……。」

と老母は語をなやめぬまで情なきを、無理にこらへて、

「昔、さう言つたからつて、自分ぢやさうでないつもりになつて、少し勉強して職をすれば可と思ふんだに……。」

「阿母様……阿母様、お前は足りないと思つてくれるのか……。」

その答へが母親には一層辛く。

「え、あゝ、阿母様でば……。」

「……。」

「皆、お店でも、我家の人でも……皆、足りない／＼つて言ふけども、そりやどうせ……私は、馬鹿さ。」

「何だとえ？」

「あ、足りないに極まつて居らぬね。」

「極まつて居るなら、足りないと極まらないやうにすれば可ぢやないかね。」

「足りないものは、どうせ足りないよ……。」

その諦めの好過ぎるのに、驚くよりは呆るゝ老母の、さて呆れて果つべき場合にはあらずと、後齒を踏鳴らして坐を前め、

「どうせ、足りないのだと、極めて居るお前には、何を言つたつて、仕様があまりやしないけれども……。私は……私は、この阿母様は……この阿母様は……。」

と矢庭に涙が突いて出て、聲が解らず。

「え、何だつて、阿母様。」

「阿母様は……お前……を……足りないとは思……思つてやしませんわね。」

と泣入つて仕舞ふ。

「それぢや、阿母様だけは……利口だと思つてくれるんだね……有難

So」

此方に構はず笑つて居る民。

「利口だとも思つてやしません……。」

「それぢや、何だつて？」

「阿……母様の……可愛い子だと思つて居ます。」

「そりやどうさ。阿母様の子さ。」

「阿母様の子なら子のやうに、阿母様に孝行しなくつちや困るぢやないか。」

「それは、孝行をしろくつて事は、度々阿母様が言ふから、知つてらあね。

けれども……。」

「けれども……何さ。」

「けれども……私は、手に職を覺えて居るから、その仕事をする事は出来

るけれども、孝行する事は出来ないな。」

「何故出来ない。」

「多少は聲も荒々しく。」

「だつて、さう両方、出来やあまなしいもの……。」

「両方出来やしないうつて……片方の職だつて、碌素法まやあしないうぢやないか。稼いで働いて、店の評判をよくしてくれさへすれば、それが何より阿母様への孝行なのさ。それを……それを、何の事、まあ、忘れ放題に怠けて、仕事をまないから、今夜見たいな事になつて、法返しがつかなくなるのだね。」

「仕事をするにも、地金がありやしねえ。地金を買ふにもち錢がありやしねえ……。」

「民は獨りて呟いて居る。」

「地金を買ふち錢だつても、上げたものにちやんと、いくらと直が振つてあれば、その割で幾らだつて地金を買へるぢやないか。仕事はまやあせせず、ち錢はなし……地金を買ふち錢より、さうくだつて、あの二階を只で貸してくれやしないうぢやね。」

「阿母様、今までは只借りて居たのかい……。」

「知らない………」  
あまりの腑甲斐なさに言ふべき言葉もなく。

「あ、さうだ。阿母様、まさか他人のお前と私とは、何ぼ、あすこの家の人がえらいつて、只貸してくれやしない。そりや知つてるよ阿母様……。阿母様が拂つてるんだらう。さうだらう。まあ、幾ら遣つてるんだい……。え、あ、阿母様……。」

「知らないつてはよう。」

「え、隠したつて仕様がなげやないか、阿母様、親子の間ぢやないか。幾らで借りてるかお話しよ。よう、阿母様……。」

「幾らで、借りてるつたつて何だつて可よ。もうお前には呆れちやつたよ。まだ、これであの二階を逐立てられないからまだしもだ。この上逐出されたら、もうどうしやうもありやしなう。」

「そりや、さうな……。」

「何が、そりやさうさなんだい………」  
呆れ返つて仕舞つて、もうどんな事があつても、民には口を利くまいと思つて居る。

「四」

民も大に考ふる所があつて、さて、

「それぢや何だね、己はもう、お店の仕事は出来ななんだね……。え、あ、さ、まつくぢやちやつたんだね……。え、あ、阿母様。え、返事しないの。」

「知れさつた事を、お聞きでなうよ。」

「それぢや、まつくぢやいたに違ひないね……。どうも仕方が無い。もうそれまでだ……。」

相も變らぬ諦めの早さには、母親は又も驚いて、言ひたくてたまらないのを、

漸との事て堪へて居る。

「それで、阿母様も行って、いろ／＼お詫びをまたんだけども……どうしてもいけないと言ふんだらう。さうだらう。え、あい……。」

「それは私に聞かなくつても、お前があの、並の口を少しばかり拵へて行って、叱られて歸つて来たのを知つて居てだらう……。」

「あ、知つて居る……あれか。」

「それで、お前ちや話が分らないから、阿母様に來いといふので、お前を此のち稻荷様へ待たせて、私だけ行くと以つての外の御立腹さ。」

「誰が怒つてたい。本矢さんか、鏡部さんかい。あの鏡部さんだらう……。彼奴は因切ていけないや。」

と空嘯く。

「直、お前は、何ていふと、人の悪口ばかりいふよ。人の悪口を言ふほど、自分がえらいかい。考へて御覽、明日の日御膳を喰へるお錢がないつていふ

のに。」

「だつて阿母様には、あの上げて行つただけのものはくれたつていふぢやないか。あれはどうしたの、お錢ぢやないのかい。」

「お錢ぢや……。」

「お錢なら可や、お米が買へられあね……。」

「茶化し切つてらあ、本當に……。」

民はさも名案を考へ出したやうに、小膝を打ち、

「さうだ……！」

何が「さうだ」かと母親は口惜しがつてゐる。

「なるほどそれで以て、鏡部が何なんだ……馬鹿な奴だあ……。阿母様、

阿母様行つた時……あの……それ……何とかいふ……それ……人は

居たかい……え、あい。それ、あの……分つて居るだらう。」

無氣味な笑ひを月に漏らす。此方は「あの……それ」は元より分らないの

で、黙つて居ると、

「それ、く……何とか言ふ、それ……大きい、お嬢様よ。居たかい。」

「居たかいた、何です。入らしたかつて聞くもんです。」

「ぢや……入らしたか……それなら可だろ。」

大きいお嬢様とは、お千夏様の事。何を言つて、また洒落たらう位に答へぬ

と、

「え、ちい、あの、お千夏さんてのか、あの人は……入らしたかよ。」

「お千夏様の事なんか、聞いたつて、何の益に立つ……！」

殆罵るやうに言ふ。民はぐちやりと笑つて、特にその憎いほど揃つた白歯を光らす。

「ところが、益に立つから可笑しいんだ。」

「何の……。」

「お詫する益によ。」

と雑作もなく。何を言つて居る事か！

「え、ちい、入らしたかよ。」

「入らつしやらなかつたよ。うるさいね。」

「え、入らつしやらなかつた……？」

と眉を顰めて、心配さうに首を振つて、

「入らつしやらない事はないが……。」

「入らしたつて、入らつしやらなかつたつても、お嬢様の事なんか、今聞  
いてる場合ぢやないぢやないか。」

「それや、さうさ……。それや、さうには違ひないけども……だ。入ら

つしやると、ちやんとお詫が叶ふに知れて居るんだ。」

自ら得たる所のあるらしく頷くの、何かは知らず、母も氣になれば、

「入らつしやらなかつたよ。何だか、濱町とか、蛸殻町とかへ入らしたん  
だつて、八時打つたら迎へに行つてお出でつて、お女中様が店の人に言ひ付



けて入らしつたよ。」

「蠣殻町……？ちや、何だ、沖野さんだ。知つてらあ。私もよくお迎に行つた。屹度已が行つて居れば、お迎へは己が行くんだ。」

「どう言へば、そんな話もあつたね。今夜これくつて、お嬢様のお迎へに行つて、お駄賃を頂いたつて……。」

「さうだ、二十錢づつ、度々貰つた。」

「貰つたつていふものがありますか。頂いたつていふものさ。」

「蠣殻町……。近いや、己迎へに行かう。」

「何？」

「而して何だ、お千夏さんに頼めば分ないや……。」

「本當に、お詫が出来るのかさ。」

母親は只一向に、お詫さへ叶はくと思ふ矢先、珍らしく民が頼ありげな言葉に、親心の迷ひ易く。

「分があるんだもの……屹度、お詫が出来るよ。」  
と莞爾して。

「分とは何さ。」

「分……その分は……少し、言へない事さ。」

「言へない分つてあるかね。」

「阿母様、何だらう箕部さんが、怒つて阿母様に然言つたらう。可や。」

あの箕部は、お千夏様大さうひなんだ……。ちやね、私は是から……。お迎へに行つて、よく頼まあ、可だらう。お千夏様は、箕部が嫌ひな代り、私は大好なんだ。」

「何言つてるんだい……本當かい……。」

「本當だよ。屹度だよ。受合つてお詫びを頼まあ。」

「だつて、お嬢様が店の事にも口をお利きなされやしないやね。」

「ところが利くんだよ。まあ、可や阿母様、今夜だけ私にお任せ……。」

屹度お詫を志て貰つて見せらあ。」  
猶り吞込んで、つと立上る。

「可のかい？ 私には、何の事たか、分らないよ。」

「可から、阿母様は、風引かない内、二階へ行つて待つても居てよ。」  
言つてもう行きにかゝるので。

「お前、本當にも迎へに行くのかさ。」

「あゝ……行くつて、言つてるぢやないか、先刻から。」

「それぢやね……よく、丁寧に申上げるのだよ。可かえ。」

「自分の女房様に、丁寧になんぞ申上げる奴があるかい！」

それが母親には、遠くて聞こえぬかして、

「え、何え？」

「いゝえ、此方の話よ……。」

すたゝ河岸の方へと、出て行つて仕舞ふ民。隣の質屋では火の用心のから

く、かゝち！

『五』

世の中に久しいもの、二つ。曰く、不景氣。曰く、娘の評判。

誠にどうも、御同然様に仕方のない不景氣は、この町内もその敷を漏れず。

屢之を嘆ずるの主客は、また常に娘の評判を語る。

寫本ながら、茲に五ヶ町娘評判記といふ物あり。潭香流を少し習つた筆者、

即ち著者の某庵主人とは見えるが、元よりその誰なるか知らるべくもなし。

巻頭に番附を附し、ついて本文はその一々について品評を下したるもの。行文

殊に平易にして、批判は公平、説明は懇切、是當代の高襟よりも、この町内

の粹士たるものは、一日坐右に於て一讀の價値あるものぞとは、その巻末に、

色摺の廣告めかしき自贊文の稱ふところ。

試に、紫屋のお千夏と、その妹お萬智との評判は如何と見てあれば、お千夏

は年寄として附録の方に記しあり。即ち一度でも他へ嫁したりとの所謂を以て、その名目を附せられたるものと著く。風姿、容貌に附いては、誰が眼もさのみには變らざるも、快潤な代りに多辯なのは、妹も萬智の沈着にして寡言なるに劣れり云々との評言。

さて翻つても萬智の件を見ると、東の小結、上々とあり。花も匂ひ出でんとする二九の粧。細面に、星のやうな眼元は亡き母上の遺物とも謂ふべく、つひ此頃肩揚は取りながら、利溷なる性はその細い眉の間にほのめき、すぢりとした背にその氣品の高さを顯し、母上逝き、姉上の嫁したる後を嗣ぎたる家政の切り廻し方、到底世の島田結ぶ娘の及ぶべくもあらず。はた機敏なるは、姉のち千夏も三舍を避くる所と記してある。

公平か、懇切かは知らぬが、この著者の言ふ所から見れば、世間は才色兼備の淑女として萬智を遇して居るかの如く、而かもこの明星の光に對しては、姉のち千夏の美點は、闇の中に埋もれて。

果して萬智は明星の如く光あるか。お千夏は然く闇の内に埋もるゝに似て果敢なきものか。乞ふしばらく攻究の時を與へよ。

夕餉の後のち萬智の務は、店の帳合に合はすやう、まづ勝手雜用の扣へを調べ、女中達の湯銭を整へてそれゝに渡し、奥の八疊の間に居る父の許に行つて、新聞の續きものから三面の記事まで讀んで聽かせ、靜にその寐間に誘ふのが夜毎の例。

帳合も濟んだと見えて、十露盤を一つに纏める音、帳場格子を外す響、賣上を奥藏へ運ぶ、番頭の本矢の足音より、金庫の開いて締めるのが聞こえて、直ぐに隠居所の襖の外。

「え、旦那様、お休みなさいまし。」

「あ、お休み……。」

と此方に應ずる主人三右衛門は、空氣洋燈の下、縮甲斐絹の蒲團の上、曲業に身を持たせて居るのに、新聞を讀んだ後をお萬智より言出て、父の肩を

叩いて居るところ。

「あ、一寸、本矢さん……。」

此方より萬智が呼びかけたので、

「へ……。」

と答へて、其所に現る、胡麻鹽の頭。

「どうして？先刻の……。」

「へ？」

「帳合……合つて？足りなかつたの。」

「へ？へ……。」

と本矢は少しへどもどして、

「へい、壹圓貳十錢の出が……何でござんして。」

「帳合が、合はなかつたのかの……。」

額の皺に人を判む三右衛門が上眼遣。

「へい、へい、あの、合はないと申した分でもござんせん。たゞ一寸……。」

「でも、合つたんでせう……一寸……。」

眼顔で知らせる見振。

「へい……へい、丁度、何で、足りないと思ひましたのが合ひまして、合

ひましたのが足りまして……。」

お萬智は少し可笑しく、片腰を寄せて、

「さう……ぢや、合つたのね。それでよくつてよ、私も心配になつたもん

だから、一寸……。」

「え……別に御用は？」

「あ、歸つて、の、早く休むが可いよ。」

「難有う存じます……。」

と丁寧に、一禮して引下る。

「何、一兩といふ金の不足があつたのかの？」

父は肩の纏に音調が少しく断續すれば、ち萬智は美しき結綿の首を傾げつゝ、  
「いこえ、あの、かうなのでございますよ。私が、あの、いつものやうに雑  
用の張合を致して、店へ持つて行きますと、店ぢや、足りない〜と言つて  
騒いで居るのでございます。それからね、あの、私が、どうしたの、餘程足  
りないの？つて聞いて見ますと、五圓どうしても多かつたのが、多いのは足  
りないの始だと言つて、二度張合ひを仕替へますと、今度は三圓五十錢とい  
ふものが、不足になつたのでございます。それから、ほうら御覽といふ事に  
成りまして、大勢で、何か出がないかと考へまして、漸つと壹圓八十錢だけ  
思ひ出せたんですけれども後の壹圓二十錢といふものは、どうしても行き方  
が分らないと申して居りました。

尤も暮方はあの、御存じの、民ね……馬鹿の、彼がまた、仕事を持つて來  
ないで、もうどうしても我子の用はさせない。阿袋を呼んで來い、さつぱり

断ると言ひますし。それから阿袋が參つて、種々泣言を言始めます。まあ、  
店へはお客様があるといふやうな事だ。屹度出たものには違ひないのが、一  
寸附け落ちましたのだらうと言つて居ましたのでございしますが……。只今、  
本矢の申すのぢや、行き方が知れたやうに言つて居りました。屹度壹圓二十  
錢が分つたのでございませう。

「どうかの……どうかの。」  
と頷いて、

「あつたらば、まあ、それで可いやうなもの、壹兩が壹歩でも金は金だて。  
手落といふ事は場敷を踏んだ年寄でも、つひ有り勝のものだから、ち前もよ  
く、氣の附いた事があつたら、言つて遣らなくつちやの、いけないつてよ。」

「はい……い、え、私なんぞ、まだ子供でございますもの……。」  
さも仇氣なげにしなを志ながら、

「そんな事、私に行き届きは致しませんわ……。」

折から例の襖越に挨拶して歸る、番頭二三。

「六」

暫時は肩のはたくと鳴るのみ言葉はなかつたが、

「ねえ、あの、阿父様……。」

「え、何。」

その答があまり急に、而かも父はその顔を振向けて、矢庭にも萬智の顔を見上げたので、此方は少し退避ぐ。

「え、何さ、私を呼んで。」

「あの……。」

と言ひ惜いのを努めて、

「只今仰つた事ねえ……私ちや、とても……女ですもの……まだ、子供見たいなものでござりますもの……とても行届さや致しませんわ。て

ござりますけどもねえ……阿父様……ねえ……。」

「何が、阿父様だか、私には分らないの。」

と父は懐かしげに笑つて居る。ち萬智も笑ひながら、

「あのねえ、阿父様……。」

「またから……。」

言はれて一層當惑して。

「だつて、何だか言ひ惜い事なんですものを……。」

と叩く手もたゆく、沈んで仕舞ふ。父は何かのねだり事かと、

「何さ、まあ、一軒……言惜い事も、言つて見なくつちや分らないぢや

なすかの……。」

と金口の煙管を手にする。

「申しても宜しいんですけども……姉様の事ですから……何だか

あの……。」

「姉様？ お千夏か……。お千夏の事で、何だ、言ひ憎いとは……。」

右手に煙草を摘まみながら、屹度見返る父。お萬智は暫時答へず。

「さう言へば、姉様は、今夜まだ歸らないかの？」

「はい……まだ。もうお歸りてせう、お迎に遣させましたから……。」

三右衛門は煙草を二三服續けながら、

「お千夏もまた、不惑なものさ喃……。」

と獨言つ。お萬智は急に、

「ですから、私も、姉様の事で……あの、心配して居りまして……。」

「は、あ、それが……それなら、分つたよ。」

と頷いて、

「それや、心配するには及ばないよ。今にどうにかまますよ。」

「どうにかまますと仰つても……。」

お萬智は我を忘れて父の前に向き直り、

「阿父様、姉様をどうなさるのです。」

「どうと言つて、差當考へもないのだがの……。彼も惣領で……まあ、

萬坊を置いてどういふのぢやないが、謂はら、この紫屋の後嗣でなくつちや

ならならぬの。」

「本に、左様でございますとも……何故……。」

「それをまあ、不圖した事で、あゝいふ事になつて、是非にと、濱澤の方か

ら言はれたので、義理に迫つて遣つたらば、三年経つたらまたあんな事にな

つて仕舞つた。お前の阿母様が生きて居たら、何と言つて腹を立てやう……

……！ 私はまた面目もないのさ。別に金銭に轉んだり、向の名目が好いからつ

て遣つた分でもない。只、そんなに娘を、何だといふから、それ程に思つて

くれるのなら、屹度未始終は大事にするであらうと考へたから嫁つたので。

……。こんな事になるのなら、初から遣りはしません。それも、まあ萬坊

の前だが、まだ、まあ、彼を遣つても、お前といふ掛替はあるのだから、慰

舞だ何だと騒いで、下手な者とても縁を組まれたら……。あ、それほどなら  
ら瀧澤の言葉通り、向ふへ疾うに遣つた方が、お千夏も仕合であつたらうに  
と、後悔したとて後では追付く分のものでもないからと、つい、あの時はど  
う思つて嫁に遣つたのさ、の……。私も、お前達の阿母様が居りや、そん  
な心配は志やませんのだ。それが、あんな事になつて是も男親の失敗なの  
だから、どうも今更、取つて返しが附かない分なのだよ……。」

「本に、あの、姉様は、お可哀想でございます。」  
とお萬智も銘撰の袂を噛んで居る。

「どうも、今更、取つて返しが附かないで、私は困つて居るのだ……。」  
とお萬智も漸く涙になつて、

「私が……子供の様な私から、さう申しちゃ何てございませぬが……。此間  
も一寸、外神田へ参りまして、何でしたら、叔母様がお話なんてござい

ました。叔母様も、あの……心から、あの、姉様の事ぢや御心配なすつて、  
まあ、紫屋には後取の男のお子がないのだから、寧今の内、あの姉様に……  
。」

「姉様に、舞を取れつてか……。」

「は……あの……。」  
と俄に口籠るお萬智。

「それが……私も、度々人に言はれて困つて居るのだがの。お千夏の嫁  
つた、縁家はあゝいふ、實業家……とか何かでも、門構への家に居るもん  
だから、何でも、様子ぢや、奥様と言はれて居たやうだ。の、さうだらう。

お前などが遊びに行つてどうだつた、え？」

「は……。本に、さうてございませぬ。姉様の事を奥様、奥様つて……  
。姉様もその時、勝手が違つて可笑しい……。よりか、何だか容態振つて  
居るやうで、我家へ行つた時、極りが悪いつて仰つた事がございませぬ」



け。矢張……そんな事を、私が申しちや何てすけども……。姉様は、矢張、當前の、かういふ手堅い、商家に入らしつて、お聲様をお取りなすつた方が……。」

「萬坊はさう思ひますか……。」

「は……。」

「私は、の、さう思はなすのぞ。」

「え？」

と驚くお萬智。

「い、え、私、私、私、もう、お千夏に舞を取らせやうとは……もう思つては居ませんのぞ。」

「さうしてござりますか……何故……？」

と父の色を窺へば、

「そりや商家ほど手堅いものはないの。殊にこの間屋商賣ほど、磐石のやう

なものはないの。やれ、何大臣だ、何官だと言つて、長く髭を生やしたからつて、一度失敗があつたらどうまたものだ。皆、元の空阿彌になつて仕舞ふぢやないかの。商人に限る。人間は商人だ。何でも、商人でなくては、永代の渡世は出来ない……。それだのにあのお千夏だが、の……。」

「いや、いや、いや……。」

と冠を大きく振つて、

「是や、お前の前ぢや言はれない。堪忍してくれ、よ。」

「姉様はお聲様をお取りなすつて、手堅い商家の後嗣におなりなのは、お向さならぬ方だと仰るのですか。其れぢや、姉様でなくつて、誰方がお後に直るのです。」

ぎろりと星の眼を輝かすお萬智。はたと胸に當る所のあるは父。

「まあ、まあ、まあ……。今はお前に、その事は一寸言へませたのぞ。」

「あの、私には、それをどうしてもお聴かせなさいませんの。」  
と萬智が不平な顔をするのを見れば、またそれも不感に、

「あ、萬坊、氣を悪くまでおくれでないよ。」

「はい……………いこえ、私は氣を悪くなんか……………」

「どうか、頼むから氣を悪くまでおくれでない。お前は本當に、心から姉様  
思ひなのだから、私や、お前にはとてもあの子の事は言ひ切れないのだよ……………」

「では私が、姉様の事で、いくら心配して居りましても、お聴かせ下さりませんか。」

「さ、さ、お前が姉様の事を心配し過ぎるから、却つて私は言ひ切れないの  
さ……………。これがさ、の、萬坊が、姉様の事には、知らん顔をまで居てくれ  
ると……………」

「あら、私が……………唯一人の姉様の事に、知らん顔をまで居られませうです

か……………」

と居丈高に問詰むる萬智。

「や、や、さう言はれちや叶はない。どうか堪忍しておくれよ。の。」

「堪忍するも堪忍しないも、そんな事は……………そんな事は……………」

と此方は堪へく居た心の苦を一時に、聲を揚げて泣き出だす。叱咄した  
のは父。

「これ、これ、これ……………さう泣いておくれちや、私が困る。よ、よ、泣  
いちやいけない……………實、私も姉様の事ちや心苦しいのだから、の……………  
堪忍しておくれ。よ、堪忍しておくれ。」

と賺しつ宥めつ。萬智は俯伏した儘の涙であつたが、忽ちに開き直つて、

「それちや阿父様……………」

さつぱり言ふも、疊り聲。

「阿父様は……………阿父様は、姉様を……………私には唯一人の姉様を、阿父様は

可愛……可愛いは覺召して入らつしやいませんのね……。

「そ、そ、そ……。」  
父は周章。

「そんな、可愛く……ないなると、思つて居やしませんよ。の、だから……。」

「い、え、姉様を……屹度、惜いと覺召して入らつしやるのです……。」

「そ、そんな……。」

「い、え、屹度さうです。さうに違ひはございませぬ……。」  
父は窮してもう言句はなし。

「それぢや阿父様……阿父様、何故、それぢや、姉様がそんなに惜いの  
でございませぬ。それを仰いませぬ。それをどうぞ、仰つて下さるませ。」

「惜いなんて事を言ひはせませぬよ。」

「でも阿父様、お後嗣の事は私に言ひ切れないと仰いますから。」

「そりや、お千夏が惜いからといふのぢやないの、の。」

「もう私は、存じませぬ……。」

お萬智は又も俯伏した儘、ひた泣きに泣いて、泣いて泣き止まず。

「私は、迷惑する……どうも迷惑する……。他の事なら何でも萬坊の言  
ふ事を聽きます。の、だがたゞ、是だけは、とても私には言ひ切れないのだ  
から……。」

お萬智は、前髪の崩れるほど身を揺つて、

「宜しうございませぬ。宜しうございませぬ。あんなに、お可哀想な姉様をお憎  
がりなすつて、どんな事があつても、お聲様をお取らせになりはせないんで  
ございませう。」

「そ、そんな、分ぢや……。」

「い、え、さうです。私はちやんと存じますから……。」

時しも、遠く店の大戸の明く音がすると直に、店の者の大勢が呐喊を造つた

笑ひ聲。

また若い者の何を巫山戯てかと、その方を見向く時、ばた／＼といふ物静な足音は廊下に聞こえて、やがてその襖が明く。

「あの、只今……。」

と訝しくた聲は、今もその話のお千夏が歸り。

「まだ、阿父様、お休みなさらないの……。」

膝行つてこの間へ入れば、忽ち眼に止まるもの。

「あら……萬ちゃんね……。どうまたんです、阿父様。」

父はたゞ恐縮の躰。お萬智は一層泣き聲を高く。

「萬ちゃん、まあ、どうまたつて言ふのさあ。」

「十」

翌朝お萬智はなほ泣眼らした眼をまて、黙つて顔を洗ひ、黙つて膳に就き、

また黙つて座を立つて仕舞ふ。

お千夏は何が何やら、分らないが、それを知る父の心苦しさをさうでなくとも、お萬智には、常に一目置いてかゝつて居る事として、この際一層その氣を悪くまてはと、お世辭を遣ふ。洒落を言つて笑はせやうとする。然し、一向お通じがなく、お萬智は依然として黙、黙。

「あゝ寡言でも困るわい。」

と後で呟くのを、聞附けたお千夏は、強ひてその所謂を父に聞くに、元よりその事なれば、父は一層當人に言へはせず。

「何だか、私は知らなうよ。」

とばかり遁げて居る。父妹の舉動のいかにも怪しければ、お萬智が朝の用事を果して後、お千夏は直ぐに己が居間の二階へと誘ひ來る。

「どうまたのさあ、萬ちゃん。何、そんな辭してるのさあ。」

「え……。」

と言つて火鉢に焦りながら、灰ならまを弄つて居るのみ。

「萬ちゃん、昨日結つた髪ぢやないか。鹿の子も何も、御覧、こんなになつて……。」一寸、私撫附けて上げやうか。」

と立上らうとするのを、

「可くつてよ、姉様。」

「何故、髪を撫て附けるのが可くつてよなのさ。女の身嗜つていふぢやないか……。」

お萬智は嘆息を吐いて、

「髪どころぢやないわ……。」

と細い、力のなささうな聲。

「髪どころぢやない？ そんなに心配な事なの……。」

何気なく後の用箆筒の上を見ると、羽二重の半巾へくるんで、昨夜お浴に半分遣つて歸つて来た酸漿がある。

「あゝ、一寸、一寸、好い物上げるわ。」と取つて来た、薙刀を根から一つ切つて、

「おあ……。」

お萬智は只受取つた儘にまて居るのに、お千夏は一切構はず、一つを口に入れて、小鳥の啼く音の如く響かせつゝ。

「困るのは私ばかりだわ。」

とお萬智は眩いたので、後があるのかと待つと、もう二の句もなし。

「どうまたのさあ。可笑いぢやないか。昨夜歸つて来た時はあんなだつたし。今朝になつて聞けば、阿父様は、知らないと言ふ。萬ちゃんに言へば、

髪どころぢやないだの、困るのは私ばかりだのつて。而しては、嘆息ばかり吐いて居る……。それが本當の要領を得ないつてもものなんだわ。」

「ちう……。」

「ちうつて、本當にさうさ。始終お前さん見たやうに、獨り考へて、心配は

かしまて居たんぢや、一生概が上らないぢやないか……。矢張、あの蠅  
殺町のお落ちやんもさうで、あの病氣だもんだから、もうそりや昨日なんか  
も餅を籠んで居るのよ。私ばかりいふ氣だし、我夢婆羅に言つて騒いで來た  
んだけども……。歸ればまた、萬ちゃんも餅の蟲。阿父様に何か叱られ  
たの？と聞けば、そんな事ぢやないつて言ふし、心配な事かつて言へば、黙  
つて居る……。え、萬ちゃん……。姉妹の中ぢやないか。何でも言つて  
おくれなねえ。

「え、え。」

と頷く萬智は、

「姉妹と思やこそ、私、こんなに心配して居るんだわ……。」

「何、姉妹と思やこそ心配して？ 獨心配してるのなら、姉妹の中ぢやない  
の！ よう、實の姉妹だから、心配は半分づ分けにきやうぢやないか、え。」

「それがさうは行かない事なの……。」

「さうは行かないた、可笑しいぢやないか。」  
と豊に笑ふ千夏。お萬智はいつかもう涙になつて居る眼を、怨めしげに姉  
に向けて、

「姉様ゆゑに、私が本に困つて仕舞ふんだわ……。」

「私ゆゑに困るつて……。」

「は……。」

「何の事なのさ、まあ、言つて御覽な……。」

お萬智はつくづく考へたもの、如く、

「姉様が……あの……。」

と言ひかけてまた、

「お怒んならるといけならぬわ。」

「怒りやまならわ、私、まあ言つて御覽なさうよ。」

「ぢや言ひますけどもね……。姉様が、もう少し、あの……家政の事を

お構ひなさると、さうすると、大變阿父様の御機嫌がよくお成りなさるのに……。

「家政の事？つまり奥の事？」

「ま、さうなの……。お氣に障つたら御免なさい。」

「大丈夫よ。」

と合點して、

「奥の事を、どう構ふの？」

「勝手の事は毎日の事て何てすし、店の者の四季着の事やなんか……矢張……。」

「そりや萬ちゃん……。」

「姉様がお馴れなさらぬ事ぢやないんだから……。」

「そりや萬ちゃん、何ぢやないか。私だつて家政の事は知つて居てよ。そりや知つて居るにや違ひないけどもね……。萬ちゃん、まあ者へて御覽。」

と鬼灯を手にきて、無心に唇て弄りながら、

「私やもう、一度でも外へ嫁つた時で。三年も我家に居なかつたのだから、奥の事だつて、全て違つて居るし。もうさうなつてから、萬ちゃんが仕切つて遣つて居たのだから、私が、何、口出す事がありやまないぢやないか。」

「それなのよ、それがね、姉様、何なの……。」

「それが、却つて阿父様の御機嫌の悪い基なんだろ。」

お萬智は黙つて居る。

「そりや、私も知つて居るのよ。阿父様は、私が彼方から歸つて來てからつていふもの、御機嫌の通し悪いのは……。それを、まあねえ、御機嫌を能くするのは、萬ちゃんの腕にある事なんだわね。」

お千夏の言葉に、氣の勢か、意あり。此方は何故か少し慌て、

「私……姉様、それが困るのよ。」

「何故……？」

「何故でも……。」

唾を飲み込む間に思案を廻らし、

「だつてね、姉様は……私の本當の姉様なんだわ。あの阿父様は、姉様の本當の阿父様で、而して私の本當の阿父様なんだわ。」

「そりや、お前さん、いふだけの事はないぢやないか。」

「だから私困るんだわ……。」

「また困るのかえ。」

と笑つて居るお千夏。お萬智は例の涙で、

「同じ姉妹の阿父様で、而して姉様の事はあむまり……。」

「そりや、萬ちゃんは末つ子ぢやないか。阿父様は、だから可愛がつて下さるんだわよ。」

「私……そんなに可愛がつて下さらずと可わ。」

「あれ、あんな勿躰ない事を言ふのね。阿父様がお前さんを可愛がつて下さ

りや、結構ぢやないか。そんな結構な事はないぢやないか。」

「些も結構な事はないわ。」

「何故さ……。」

「何故でも……だつて姉様、さうぢやなくつて？ 阿父様は姉妹の阿父様

だわ。姉妹は阿父様の子の姉妹なんだわ。さうでせう。だから、その二人し

かない子を、同じやうに可愛がつて下さるのが、本當の阿父様なんだらうと

私は思ふわ……。それを、それを、どう覺召してだか、姉様は御惣領で……。」

「……。」

と言ひながら、密に姉の心底を判じやうに、涙の眼にその顔を見詰めて、

「この紫屋の後に直らなくつちやならないぢやないぢやないか。ね、さうでせう

……？」

姉は珍しく黙つて居る。

「後に直らなくつちやならない姉様を放り出して、而して、私ばかりを可愛



がつて下さる阿父様は、私は嬉しいとも……何とも思つてやまないわ。それ  
れも、姉様を可愛がつてお後をお取らせなすつて、而して私も可愛がつて下  
さるんなら、そりや、私も有難いわ。嬉しいわ。そりや、私も嬉しいがつて、  
阿父様に可愛がられるけれども、どういふもんだか……阿父様は、さうぢ  
やないもんだから……昨晚だつて、あんなに……。」

「だから、昨晚何と、阿父様は仰つたのさ。」

「萬智は慌て、制して、」

「姉様、私も願ひ……。それだけは私の口で、言はせておくんなさらない  
やうに。」

「だつても、萬ちゃんが聴いたのでせう。他に聞いた人はないんだらう？」

「そりや聴いたのが私だけだつたから、なほと私、姉様に言へは志ないんだ  
わ……。」

「可わよ。大抵それも、私知つてるから。」

すげなく言つた言葉は、却つて萬智の胸に當たるところで。

「あら姉様、さう貴女に言はれると私情なくなるんだわ。」

「萬ちゃん、情なくなんかなる事はありやまないぢやないかね。」

「萬智は、嘆息を吐いて、程程つてから、」

「本に、阿父様はあむまりな方ねえ……。」

「八」

梯子段に数々の足音がまて、大勢の上つて來たる様子。

「誰？一寸……。」

「萬智の問ふ問もなし。廊下を廻つて障子の方から、」

「私どもで……。」

「二つの顔の現るゝは、」

「あら！鏡部……。」

「本矢さんと……朝つばらから揃ひですね。」

「へえ……。」

言ひながら會釋するのには、

「何か、用なの……。」

と、お萬智の訊ねるを引手繰つて、片頬に笑み、

「聞く事はないのよ、萬ちゃんも、ずつと私の腹で承知してる事……。」

「民の事に就きまして……。」

「さうでせう、箕部さん。だと思つてたの、ちゃんど。」

二番々頭の箕部は、殿に姉妹の横に端坐して、直ぐ羽織の下の烟草入に手を

遣る時、常から悠人の名を得たる本矢は、いつか床の前に行つて居て、

「どうしても、抱一は、かう行かなくつちや、ならねえ筈なんだ。」

腕組をきて、首を振つて、頻に感服して居るのに、

「否あよ、一寸。奥の二階へ来て欠點を探しちや……。」

お千夏の皮肉に出るのに慌て、

「い、え、いえ、どう致しまして……。よくまあ、床柱でも、板でもかう

拭き込んで……。」

「芥は店からの背負はせものですから、向ふの窓へ行つてお聞きなさいまし

……。」

「や、芥どころですか。」

となほ恐縮して、青磁に白菊の生けてあるのを、一寸名残惜しげと見て坐に

就く本矢。

「どうも、いつだつて、お千夏様に遇つちや、禿頭も叶ひません。」

お千夏は面白さうに笑ふ。本矢も笑つて、前掛の上の觀世紙繻の片を摘んで

捻つて居る。お萬智は始終尻眼に掛けて。箕部は、苦い顔を志ながら、

「本矢さんの骨蒸道樂も、大抵にするが可。」

「お店に、二人居ないと困るでせう、ねえ箕部……。」

合榎打つて、小首傾けるも萬智。

「左様でげえすとも、早く埒を明けて……。」

ぐつと呑み込む簀部に、それをもう一つ呑込む本矢。

「然らば、本題に移ると致しませうか。」

両手を膝にまやんと突いて、可愛らしい千松の見得。

「まあ、冗談はお止しなさい。」

簀部に窘められたのが可笑しいと、又笑ふも千夏。

「え、民の事でげえすが……。」

一切構はず簀部は辯じ始める。

「彼奴どう致しても、もう仕方がございませぬ、急ぎの用も何も分らないん

でげえすから。是はいつ幾日までに上げて来なくつちやいけないのだと申し

ても、その日に上げて参つた事は、決してございませぬ。現に昨晚のなんぞ

は、羽前鶴ヶ岡へ送るので、他の店から造り合せは種々来るといふ始末。尤

もあゝいふぐうたらですから、一日端折つて、昨日の晩までに上げて来ない  
と運送の間に合はないし。この機を失ふと、段々時候も寒くなつて来るので、  
もう一度船が出るかどうか分らない所なのだから、是非この便で荷出しをす  
るものだと、あれほど、言ひ告げてやつたのに、どうでげえせう……。」

烟管の空を吹いて、烟草を詰めながら、

「漸と二打か三打半しか、其も並の口を持つて来たばかりなのでげえす。え

？注文したのは、中々追付く段ぢやげえせんか。私にもう、あんな馬鹿が人

と馬鹿にまでと思ふと、腹が立つて、今度といふ今度は、もうどうして

も使はないから、さう思へつて、阿袋を呼んで怒鳴り附けて遣りましたので

げえす。」

寸時息繼の烟草にまで居る間に、

「その阿袋ですがねえ、一寸、簀部さん。」

とも千夏から話し出で、

「昨夕私やあの、軈敷町の……ほら、沖野ね、彼所へ行つてゐると、ひよつこり来たのが民なのよ。私は迎へに来たものとばかり思つて、彼所の家を暇乞をまて出てずつと河岸通を行くと、いつもは面白い事を言つて笑はせる民が、何だか沈み返つて居るのよ。可笑いから、お前、どうかおまかつて聞くと、どうもまません言ふんでしょ。さうかえつて言つて行くと、あのほら湯淺病院の所で、ばつたり出遇つたのが、例の阿袋なんですのさ。」

「あの、阿袋に撥まつちや、さすがのお千夏様も受太刀でしたらうな。」  
「まあ、本矢さんもお聴きなさいよ。途次ぢやあるけども、あの阿袋が泣言交りて、暮方からく〜いふ事で、お店へ出まして、もうお仕事の御注文を受けられなくなりました。でございませうが、お嬢様は格別にこの民を可愛がつて下さいますので……。」  
「可愛がつて下さいます。」は嬉しかつたわ私民と一苦勞して見たらいつて言つた事を思ひ出して……。まあねえ、そんな事はどうしても、まあ手もなく、私に詫びを頼みたいといふのださ。」

「でげえすがね……。」  
箕部の言葉をなほ次がせず。

「で、實は民がお迎へかた〜獨りて願ふと申したのですが、安心が行きませんので、私が後からお願ひに出ましたつてのよ。あの阿袋つ位粹の利かない人つてないわ、實に。」

「積る話が民とおありなのに、な。」  
上目を遣つて、くすぐり笑ひをする本矢。

「本當に……。」

お千夏は頷いて、眞面目になつて居る。お萬智は可厭さうな顔をまて居る。

「どうも、いけませんね、本矢さんは、交返してばかり居て。」

箕部は無氣になるので、此方は凹む。

「え、お話を手取早く致したいのでげえすが、所詮その民吉の進退なので、私は、實はどうも我慢がなり兼ねますから、今度といふ今度は、どう致して

も、首を切つて遺る丁見なので。」

「あんな馬鹿の首は、黒焼にまてても利きますよ。」

本矢が例の洒落に、鏡部はぎよろりと眼を斜く。あ千夏は嬉しがつて笑ふ。

あ萬智は面白くもないといふやうな風。本矢は珍しく語を次いで、

「や、私は申すんです。どうせ民は、あれつきりの人間で、毛が三本足りな

いはかりでなく、そりやもう、何でも彼でも、足りないといふ所が、彼の取

得です。」

「何が取得なものか。」

鏡部は苦り切つて居る。

「どうも、君は交返していきませんね。取得に違ひありません。あの取得を

見込んで居るのは阿袋です。あ、子を見る事親に如かず、阿袋はこの足り

ないといふ民の取得を見込んで居るから大やさもさう。」

「足りないなら、足りないで可んでげえす。足りないなら足りないやうにす

れば可のに、へい屹度間に合はせますの、何のつて、あつう小利口な事はか  
り言つて……。」

「是は何だ私が民の代に叱られる事か。」

本矢のまた笑ふのに、鏡部は首を振つて、

「私は今度はどうしても、注文をやりません。」

「それぢや、親子は飯が喰へま……。」

「で、まあ、本矢さんの丁見はどうなんの？一寸」

「手前の丁見ですか。」

と本矢は、南部のよく手馴れた鐵瓶に目を遣つて居たが、

「手前の丁見は……どうも、あの阿袋が可哀想ですからな。」

「何、それは自業自得でげえす。」

「あら、鏡部さんは随分残酷だわねえ……。民は怠けて、そりや、悪いか

も知れないけども、今何しちや、阿袋が可哀想だわ。」

ち千夏は考へ〜

「私やねえ……女で、店の事なんか分りやせず。分らないから、また店の事なんか口を出すのは嫌なんですけどもねえ、あの、實に……本當に、今何すると阿袋が私氣の毒で仕様がないわ。」

「實に阿袋が氣の毒です。」

「そりやねえ、本矢さん、心身になつて阿袋が泣いて言ふのよ。そりやね、十露盤の方から行つたらば、あんな馬鹿にぐづく職をさせて、日が延びたり間に合はなかつたり、そりや随分困る事もありませうけども……。またこれを人情の方から見ると、あんな子を抱へて居る阿袋の心持はどんなだらうと……。」

「もうこの期になつて、情實は許しません。」

頑として動かぬは鏡部、

「他ならないち千夏様が仰るもの……。鏡部さん、今度だけ堪忍して遣ら

うぢやないか。」

「いけません、いけません、それがいけません。」

「何故？」

「何故つたつて、今ち千夏様のち詫があつて、それからこの萬智様のち詫が叶へば、その次が旦那様のち詫と来るのは當然でげえす。阿袋も味を覺えて段々及んで來ます。どうです、その間の店の損害は、本矢さんは、御老功でもあるから、その邊は御存知の事と思ひます。ち千夏様の格別のも骨折を、無駄に致すやうて、甚だ失禮でげえすが、どうぞ悪からず覺召しを願ひたいと思つて、實はそれでも断りに出ましたので……。」

本矢は何か言ひたかつたのを中止して、

「それぢや、いよくそれに極めたのですな。」

「極めたのかつて、本矢さん、貴方にはもう、店であら言つたぢやありませんか。」

「やれ、可哀想なはこの子でございさか……。」

「何が……まあ、ねえ……。」

とち千夏は、ち萬智の方を向いて、

「ねえ、萬ちゃん、穩便な、好い工風はないかしら。」

冷然として居るのはち萬智、

「さうねえ、あんな馬鹿……どうするにも、仕方がないてせう……。」

簀部は我が意を得たりと頷く。ち千夏は密に本矢と顔を見合す。

【九】

「ち早うござやいまちゆ……。」

茶屋の勝手口の外に幼い聲がきて、からからんと鈴が鳴る。

「ちや、ち映ちやんですね。」

蝦蟇のやうな形をまて、下流に洗濯をまて居た御膳焚が應じて立上り、そこ

の鐵力戸を徐ろに明けて遣れば、隣の瀧見屋の末の娘の五つになるのが、傳に連れられて遊びに来た所。

「さあ、ち入んなちやいまし。」

ち映は薔薇色のむつくりした頬に笑んで、小さい齒莖の黒くなつた所を現に、高慢ちやくれた會釋を志ながら、鈴の入つた朱塗の木履を鳴らして来る。

「ちや、ち映ちやん、さあ、ち上んなちやいまし。」

竈の銅壺から、今拭掃除の湯を取つて居る仲働きが、聲を懸けると、ち映はまた莞爾して、簀の所へと遠慮なく上がつて行く。

「まあ、貴方、人様のお家へ……。」

傳が追懸くる間もなし、づか、女部屋の方へ行つて、障子を明けると、其所に髪を撫て附けて居た小間使に、

「ち早うござやいまちゆ……。」

毛筋を入れた髪を押へて、小間使は振向く。

「まあ〜、御丁寧に、お辭儀をなすつて。へへ、お映さま、お早うござい  
ますよ。」

據なく此方も開き直つて辭儀一つ。

「毎度、あの、お邪魔に出まして。」

と傳のいふを遮るお映。

「あら、お邪魔ぢやないのよ。」

「ちや、それぢや何です、お映ちゃん。」

「お邪魔ぢやないわ、遊びに出まして……ごぢやいませゆ……。」

「あら、まあ、どうもませうねえ……。」

と小間使も傳も笑ふ。

「こんな好い衣裳、見て頂戴。」

この春まではちよく〜にきて居た友禪の被風を、これ見よと兩袖を翼のや  
うに廣げて。

「ちや、まあ、奇麗なお召です事。」

「被風よ。」

「ちや、被風ですか、どうござりますか。美しい被風です事。」

「縮緬よ。」

「ちや、まあ縮緬でござりますか、へえ……。」

お映は何物か想出したと見え、

「お姉ちゃんば？」

くり〜とまた眼を輝かせて問ふ。

「お姉ちゃんて……？小ぢやいお姉ちゃんてござりますか。」

「うむ、大きいお姉ちゃん……。」

「大きいお姉ちゃん、入らつしやいますよ、お二階に。」

「何でもあの、お姉ちゃんの所へ、縮緬の被風を着て遊びに行くのだと仰い  
ます。阿上様やなんかとお止めなすつてもお聞きなさいません。朝つから……



「……お邪魔に出まして。」  
傳の言分を引取つて、

「あら、お邪魔つて言ふんぢやないのよ！」

お映は眞面目になつて、傳を窘めて居る。

「へい、堪忍して下ちやい……。」

而して小間使と顔を見合せて笑ふ。小間使は改めて、

「ねえ、あのち映ちやま。」

「え、……。」

「貴方ねえ、阿母様も好きでせう。」

「嫌よ。」

「ちやー」

「阿母様より阿父様の方が好きなのでござりますよ、家のち映ちやまは……  
ね。」

と言ひ説くは傳。ち映は可愛く頷く。

「ちや、どうですか。それぢや、我家のお姉ちゃんはお好ですか？」

「何？」

「い、えね、我家のお姉ちゃんはお好ですか……。」  
「ちや、……。」  
「え、……。」

ちやんは？」

お映は数々度合點しつ、

「え、……、大好！」

傳は例の説明を興ふるに、

「あの、此方の大きいお嬢様は大も好てござんすの、何でも彼でも此方のお嬢様の真似をなさいまして、昨晚などは、一寸かう、踏臺を持つて入らして、頬杖を突く真似をなさいますから、何です、それはと申しますと、お隣のお姉ちやまがかうおやりなのつて仰いますの、何かお考へ事でもなすつて入らつしやる所を御覽なすつたのでござんせう。而して、何でも大きい

いふ嬢様の真似なのでござんすよ。」

「ぢや、さうですか、まあねえ……。而して、お映ちゃん、我家の、

小いお姉ちゃんはお好ですか。」

お映は、黙つて笑つて居る。

「え、小いお姉ちゃんは、お好？」

此方は、まなをまて、長い袂を両方とも膝の上に重ねて、

「大きいお姉ちゃんの方が好なの……！」

「どうせ、私や、お映ちゃん、嫌ね。」

耳元の聲にびっくりとしたお映は振向くと、それはお萬智の結綿鬘。極りを悪

がつて居るのは小間使と傳。寸時總方だむまりの所へ、

「ぢや、來まつたね〜。」

いつの間にか横間から走せ寄つたお千夏が、突然お映に頬摺して、その儘引  
凌つてはた〜。二人の婢は呆氣に取られて。獨りお萬智は其の後を恨

めしげに見送る様。

『十』

學校ごつことをお仕舞にしたならば、今度は飯事も飽きて、買物事はお映が否だ  
と云ふ。

「ぢや、何をまて遊びませう……？」

とお千夏の考へるのを、向ふ前に見て居ながら、さちんと坐つて居るお映。

紫紺地に小槌車と花紅葉を散らした友禪のふくやかな褥は、特にこの幼き客

の爲にと拵へてあるもの、右近の綴糸に爲足の白足袋を潜らして、親指を

ちよこ〜動かして居る。

「ほんち繪は昨日見て仕舞つたし、お嘶の本も面白くないし……。」

と四方を見廻しながら、床の間に置いてある寫真帖の、

「お寫真は度々、お映ほこちやんは見てるわねえ……。」

「お映ちゃんね、私ね、お寫眞を寫しに行つたわ。」

「さう。誰方と寫眞寫しに行つて？」

「え、と、え、と……。阿母ちゃんと、阿父ちゃんと、お映ちゃんと……」

……佐久間町伯父ちゃんと……え、と……。稲やと……。皆で？」

「まあ、そんな大勢でお寫眞を寫して！」

「明日行つたわ……。」

「さう……。明日行つたの……。」

とその過現未の時を知らぬも可愛く、自からそのはつきりした目鼻位のお映

の顔に、見惚れるとなく見惚れて。

「大きい姉ちゃんさ。」

「え、何……。」

「お映ちゃん、お寫眞寫すんだつて、きませう……。」

「あ、寫眞ごっこ。きませう、〜。」

氣輕に立つて、散らかつて居る石版や、筆墨を仕舞ひ、小机を片寄せたりま  
て、南窓をさらりと明ける。

「お映ちゃん、寫すわ……。」

「お映ほ、こちらが寫眞屋さんなの？」

「え……。」

その頷く様の高慢ちやくれて居るのが可笑しく、はた懐しく。

「それちや私、姉ちゃんがお客様になつてよ。」

「え……。」

お千夏が兎角心配して、椽側から踏臺を持つて来て、その上へ、用籠筥から

出した玉手箱のやうな、朱塗の篋を出し、

「是て寫すのだつてよ。よくつてよ、お映ほちゃん。」

「え……。」

言ひながら被風の胸の紐を、頬に外さうとして居るので、

「何するの……脱ぐの？」  
手傳つて脱がせると、是が黒い冠布のつもり。

「まあ、智慧があるわねえ……。」

「姉ちやま、其所へ立つちするのよ。」

「はし〜。是でよくつて？」

とよきところを取繕つて立てば、

「へい、寫しますよ。」

小籠に附いた紫の紐を、その儘の速寫機に擬へたる氣轉。お映が幼き經驗の  
以内に行ふ事は、常にその注意深い性を現して、大人をして舌を巻かしむ  
る。

「まあよく、見て居る事ねえ……。」

「今度、姉ちやま寫眞屋さんよ。」

「えこ、なりませう〜。」

所謂寫眞場に立つお映は、衣紋を造つて、壺口をきて、下目に寄せながら、  
のどすます。多千夏はその可笑しさを堪へつゝ、髪を毀れるを避けて、矢飛  
白き召の前垂に頭を蔽ひ、お映の聲に倣つて管の紐を手にするので。

「お映ちゃん、動いちゃいけなすのね。」

「え〜、動いちゃいけませんよ。可くつて。」

「お話までもいけなすのね……。」

「いけませんとも、口がくつも寫つて仕舞ふわ。まあ寫しますよ……。」  
つとして……。」  
「多宜しゆごちやいます。多天氣が宜しければ一週間で出来  
ます。」

「お幾らですか。」

「一組繕して差上げますか。」

「はい、五錢だけ焼して下ろさす。」

「十一」

日が窓から一杯に入るやうになつて、二階の一間の隈もなく明るくなると、よくもくくくりく遊んで居たお映は、遊山事の傍、手の甲に頬と眼を擦つて居るのは、

「お映ほこちゃん、少しも睡になつたね。」

「お映のやうな眉を凝めてお映は頷く。」

「ぢや、いつものやうに、お映と寝んねますか。」

「え、……。」

音に褥の用意ばかりでなく、お千夏は壁に沿うた袋戸棚から、友の友禪で拵へた括り枕と、黄八丈のねんねこを出す。

「帯はどうして解くの？」

「え、……。」

「ぢやね……。」

と抱へて、紫羅子を解きながら、

「この立矢の字、誰方が締めて？ 當て！ 見せませうか。阿母ちゃん？ 稻や……？」

「……？」

もうそれなりにお映は、「お映ちゃん」の腕にぐたりとなる。

「まあ、五つになつた姉さんが、意氣地がないね。」

と直に褥の上へ寐かすと、早現か、あらぬか。お千夏の羽織の惹色の紐を、乳とも思つて、無意識に弄つて。

お千夏は片腕を突いて、片手は寐んねこの肩の上に載せ、まげくとも映の寐顔を眺むれば、睫毛の長さが殊に賢げながら、罪もなき口元の、何の夢見で、莞爾と笑む。

「え、どうしてこんなに……。仕様がな、仕様がな。」

矢庭に頬摺をすると、少し惱ましげに紅葉の手を出して之を支へる。お千夏

は忽ちまた其手を捕へて、掌に我が頬を叩かせながら、  
 「何故私は、かう他人が好んだらうねえ……。」  
 思はず咬いて、なほもその痛いけな寐顔を見詰むれば、漸くそれは千緒萬感  
 となつて、果しもなき念に沈む。  
 あゝ否、否。私やもう姉妹ほど否なものはないわ。縁家の姉があんな風だつ  
 て、到頭……まあ、破鏡つて言ふやうなものになるし。それから我家の萬  
 智ちやんだ、尤も十二三の時から、私とは大違ひの敏捷家で、中々人を見て  
 いけない娘だつたのが、私が居なくなつて一層ひどくなつた。いこえ……  
 こりや一層ひどくなつたのぢやあるまい。一層利巧になつたのさ。あゝ、本  
 當に誰が利巧だと言つて、私はある利巧な娘を見た事はないわ。しつかり  
 して居て、その中にも金銭の事といふと、それは／＼几帳面！あゝいふのが  
 本當の實業家の娘だと思ふの。あゝいふのが、立派な商人のち内儀さんにな  
 るんだわ。

帳合の事だつて、綿密なものよ。浴衣に附ける姫糊から、湯銭髮結銭は思  
 葉書一枚だつて附け落ちをさした事はなく、而して店へ出懸けて行つては、  
 よく店の人達を遣り籠めて居る。だから本矢なんぞは何方かといふと悪くい  
 ふ方で、お萬智さんも可が、もう少し仇氣なく、娘さんらしくまて居てくれ  
 ると誠に嬉しいがと言つて居る。私はそれが嫌、店へなんぞ出しや張つて、  
 男を侮つてそれを非難するなんて、生意氣な事は大嫌なの。  
 だから一昨日あたりのあの民の話でも、實をいふと私や嘴を入れたくはな  
 いのだけれども、何しろあの阿袋が、あの常識のない民を可愛がつて居るの  
 が第一、氣の毒で／＼。而してまた民だつても、己を知らない所が誠に不慥  
 て仕様がなから、あの場でも、店の事に口を出すのは嫌だと、わざと誰か  
 に當て附けて錢部に左様言つて遣つたけれども、私やまあ、どういふ理屈だ  
 か、民といふ人が、店の人や何かに話されると可哀想で／＼ならないの。そ  
 れは何も『一苦勞する』と言つたからつて、本當に民とどうかうといふので

はないが、私や民の事に就ちや、時には、ある意味で言ふ「一苦勞」をまて見る積なのさ。それを萬智ちゃんは、頭から民を退けて居る。それが第一氣に喰はないので。人間といふもの、其の内にも始終男性といふものを待つて事を謀る、まあ謂つて見りや受太刀になる女性つてものは、あるところまては随分深い同情と言ふものが肝心だらうと思ふんだわ。私や、何所までも言ふの——同情のない女性は、身を誤る！つまり同情が自分にないと、他が同情を寄せてくれない。手もなく憎がられる種なんだわ。

「だから、お映ほちこちゃんも、憎がられないやうになさいよ、よ……。」

可愛い顔で、知らぬ振で、好い心持に寐て居るわね。  
つまり私の言ふ同情は、極廣い事をいふので、蟬の鳴き聲を聴いたり、蛙を聴くのにも同情がなくつちやいけないのさ。そんな事をいふと何だけでも、萬智ちゃんといふ娘にはそんな同情は塵つ端にもなく、唯二三天作ばかり、只自分さへ可ければ可と思つて居るのだから仕様が有りやしない。

さういふやうなもの、私や萬智ちゃんを妹としては愛して居る。器量は私より美し、髪は毛は美し。上品で、華族様のお姫様としても、見上げられるので、私は形といふ上と、それから人の道の姉が妹を愛して居るだけと、萬智ちゃんを可愛がつて居る。けれども、凡て、不斷の事を見て居ると、女性にあられない事をして居る所がある。つまり先刻言つた同情がないので、何でも自分といふ事が土臺なんだから、遣る事が冷たいの、冷つこいの。それが私あじまり、感心しない所だと思ふ。

可さく、それも他人の事！いくら此方ばかり姉妹のつもりで居たつて、向ふにその氣がなけりや、志が通らない。だから私や自暴になつて、民に一苦勞して見たいと言つて遣つたり、このお映ほこを、私の妹だつて言つて萬智ちゃんに厭な顔をさせて遣るの。

又このお映ほこほど可愛い子はありやしない。いこえ、只可愛いばかりでなく、私は、どういふもんだか、この子が餘所の子と違つて見えるの。違つて

見えるといふのは、つまり人間のやうには思へないの。私は、時によるとこの子が、神様のお子で、私の監督と言つたやうな風に降つて来て、他愛ない事を言つて居る間にも、始終何事かを私に命じて、善い方へ〜と誘つて居てくれるやうに思ふの。

「まあ、御覽よ、この寝て居る顔！」

私やち映ちやんが、可愛いよりは貴いやうな気がするの。気がするのぢやないだらう。かういふやうに寝て居る時でもさうだし、起きて居てする事を見ても、時には人間以上の事をするので、私や、もうその度に感心して仕舞ふわ。

私は、けれども人間なのさね。だから自分を知らずに、罪を作つて居るかも知れない——あ、知れないぢやない、知れて居る——罪を作つて居るに違ひない。だからこのお映ちやんの寝顔を見ると、この子が可愛くつて、貴い、神々しいと思へば、何だか罪のある身を責められるやうになつて、心が

答めて、早く懺悔して清い體になれと、言ふやうな聲が何所となく聞こえる。

「あゝ、御免よ、お映さん。私や唯一つ罪を作りましたわ。」

え、何の罪……！白状します、懺悔します。

「一寸、私や、本當に懺悔するわ！」

はつきりした所を言ふと、私や沖野彌三郎と云ふ方を愛して居る。これが罪なの。その愛が直ぐに、何故罪なのか知ら？私の境遇としては、どんな事があつても沖野さんを愛してはならない事があるのを、まあつまり、天理に背いてあの方を愛して居るの。だから罪だと思ふのよ。

第一起因が、自分で居ながら、同情しかねるの。まあ、彌三郎さんと私とは、お約束の小學校朋輩だけでも、向は男生徒で、私を知つて居ても女だと思つて相手にまないのだけでも、それはあのお落ちやんとは、日本橋俱樂部の軒屋のお浚ひで遇つたの。まだ向ふの阿母様がお居ての時、悪意になつ



て、二三度あのお家——隣町に繁昌だつた頃のお家へ行つたり、來たりして居る内に、誰いふとなく我家で評判を立て、善悪ない口の端に何だ彼だと言はれたのが、私は十五六の頃からこんな氣だから、『あゝ私や彌三郎さんに首つたけよ』つて、怒鳴つてやつたのが、今思へば阿父様のお耳に入つて、而して見じめな鳥流しになつたのに違ひないの！  
手もなく私は、傍の評判から、つひその氣になつて彌三郎さんを……何なのだから、どうしても此戀は圓滿なものぢやない。圓滿なものてなれば、とても末の見込がない、末の見込のない、圓滿でない戀を知りつゝ愛して居るのは、手もなく神様の御意に逆らつた事なのだから、それで私や罪だと思ふの。

まだ實の所、私がいくら愛したからつて、あの方の方ではどう覺召してだか知れないので、私をはじめ口惜しいと思つた。情ないと思つた。けれどもよく考へて見れば、その口惜しいと思ふ事、情ないと思ふのが間違つて居

る事と思つて、私はその果敢ない戀を捨て、あの冷つこい縁を獲たのよ。經歷を言ふ事はないけれども、それやもう縁家でひどい目に遇つたといふものはお話にならないの。その時私はまだ十八だつて、少かつたから、私や死んで仕舞はうと思つたわ。而して居る内に、あの事を考へたものだから、何今死ぬ事はないと思返して、今日になつたの。

縁家から歸つてからの私は、先のがらつ鉢から見ると、心の中は丸て變つたわ。實に、變つて仕舞つて、氣は鬱いて仕様がなない。けれども私やどういふものだから、他人には自分の心底を見られないやうにゑたいといふ考へがあるものだから、えいいつそ隠す事が出来るだけ自分の心を隠して見ろと思つて、自暴も勿論交つて居るものだから、なほとお饒舌にはなる、なほと陽氣になる、それで誰を攫まへても、私や構はず打卷けて仕舞ふやうになつちやつた。而してその本心を打明けるのは、唯一人、こゝに居るこのお映さんの——それも起きて居る時ぢやいけない。かういふやうに神様の子のやうに

寝て居る時に、お話するのが一番楽みなのだ。  
さういふやうな風だから、縁家から歸つてからは、もう汚れたこの身だから、  
どんな野心を有つても駄目つ事と思ふので、すつかり諦めて仕舞つた。彌三  
郎さんと思ふのも奇麗に止めて仕舞つたの。

所が彼方は、阿父様といふ方が、悪い奴の餌にされて、山を買つたのが起因  
で亡つたし、お家はとう／＼潰れたものだから、今まで若旦那様、お嬢様で  
育つたものが、少しの財産の残りでは埒が明かないので、あられもない銀行  
通ひ。而して、妹のお清ちゃんには、元は大勢の人に冊かれて居たのが、今は  
漸と一人の女中位で、あの宿直の晩なんかはさぞ淋しいであらうと思ふと、  
私や自分を忘れてお可哀想になるの。それにはお清ちゃんは脊髄といふ難義  
な病氣で居てだし、前後を考へると彌三郎さんの胸はどんなかと、それ、  
また思ふものだから、つひ……

だけでも私や、この事は、このお映さんの寐顔に向つてこそ白状するけれど

も、他の人には尙更、あの方に打明ける事は老ない。決して打明けない。屹  
度打明けないで永久に私や一身に秘めて置くつもり。

けれどもあの兄妹の睦まじいといふ事！見る度毎に羨ましいが高じて、嬉し  
くなる、頼もしくなる。それなのに何故萬智ちゃんには、唯一人の姉を他人扱  
にするのかと思ふと、そこは女だから矢張腹が立つて仕舞ふ。けれども私や  
腹が立つほど、その有のまゝを、口に出す事はどうも出来ない。その時却つ  
て私は平氣になつて仕舞つて、ちつと我慢して仕舞ふ。

ところが可笑いのは、ずつと先の事。彌三郎さんとお清ちゃんと三人で話の  
出た時、兄様は失戀の爲めにかうなつたのだといふ。失戀……！あの方は  
どういふ事情から、さういふ事になつたか知らないが、現在私の……思ふ  
その方が……ある者を戀して、竟に得なかつたから、もう一生獨身で居る  
つもりと仰るのを、聞くと共に私は胸が一抔になつて、あゝお可哀想な事！  
大方私と同じやうに、ある境遇の爲に、餘義なく戀を捨てるやうにならな

のだから……！あゝ、この時私はたゞうか／＼と、自分の戀に躊躇つて居る場合でない。どんな事があつても、あの方をお慰め申さなくてはならないと思つたの。それでも私は、自分の事は打明けない。何故といへば、自分は身の汚れて居る事を知つて居るのだから、何でものめ／＼それを蔽つて、盡口が出来るものですか。

だから私は、清い心を以て彌三郎さんを慰めたの。彌三郎さんも、心から熱い涙を溢して泣きだつたわ。傍にお居てのお清ちゃんも、御自分のお體の爲に、未來の望を捨て居る矢先なので、泣いて喜んで、それからお仕舞が兄妹の誓ひを立てたの。

けれども私は、あの事はどんな場合にも打明けないつもり。つもりぢやない決して打明けない。だつて今打明けたなら、どうしても恩を御兄妹に着せるとしか思へないものを。だからいかに兄妹の縁を結ばつて、なほ更これは打明けられない道理になるから、その間私のおつもの傳で、お饒舌で、陽

氣に、而して何所までも本心を隠し負すつもり。その本心を打明けるのはこの神様の前ではかり……。

あれ、動く、起きる……！

「おやお映ぼこちゃん、目が覚めて？」

「姉ちゃん……お映ちゃん、姉ちゃん大好きよ。」

「えー！」

「だつて頬べたが柔かいんだものを！」

『十二』

大常盤の樓上太神樂の囃子に和して、一わたり拍手喝采の聞こゆるほど、花屋敷の逕路に横はる馬車の數輛より、供待の車夫や取者は雑談に時を費す。人通りのないこの廓内を、矢の倉の方から入つて來たのは、雨上りを黒の背廣に高足駄穿の人、蛇の目傘を提げて大地を見詰めた儘、刻み足に溝板をか

たこと、踏んで、鐵骨春を生ずる御待合の角を折れて、少し行く出會頭に、  
「あや、若大将ぢやありませんか。」

「呀！」

と言つて見上ぐれば、石版色のえんばねすから、小粋な大島の一枚小袖と黒  
八の襟が見えて、眉深に冠つた烏打帽を脱いで一禮した時、さらつと小指の  
指環が輝く。

「若大将でまたか。どうもその、私はよく似た方だと思ひました。」

一寸その風跡を見て、

「近頃は……えと、銀行の方へ入らして。」

「えと。」

答へながらも面目なさに二の句も次げぬ様。えんばねすは心得る所あり。

「随分まばらくも目に悪くありませんでした。あといふやうな工合に、その、妙  
にも店を出ましたもんですから……。」

言つて居ると一人、女髪結らしいのが、白い前掛に手をくるんで、急々通り  
ながらじろりと兩人を見て行くのに、

「まあ、立話もあつてないやうです。貴方、ずつと彌敷町へお歸り……」

その彌敷町の訖住居を、一年越も家出して逢はぬその人に知られてはと、身  
も世もあらうと恐縮する様。

「まあ、私から供しませう。」

踵を返して従ふに、来るなとも言ひ得て行く。

「や、彌敷町のお住居の事は、此間……その、幹どん、な、あの男が西洋  
小間物の行商をまて居るのに、是もその、ふいと傍で逢ひまして伺ひました  
が、あの……お落さんと唯ち二人で入らつしやるさうで。」

「私や、調さんに、合はす顔がないんです。」

僅にそれだけを言つて眞赤になる。

「是をお曲りてせう……。や、合はす顔がないなんて、そりやその、私が

申す言葉です……。」

「そんな事はないんですよ。」

「あむまり久しくお目に懸らなかつたので、何かから話し申しませうか……。」

と彼方を望んで、一寸帯の間の金着せらしい時計と相談の上。

「や、まだ五時にならない。失禮ですが、若大将……。」

つかく〜と洋食屋某樓の角に行く。

「そりやいけない、そりやいけないよ、調さん。」

「まあ〜……さう仰らずに。」

再三否むを無理耶理に上る螺旋階。

「入らし、ずつと彼方へ。」

白衣のコスメチックが樓上に出迎へて、指す方は東向の窓外、故五世菊五郎の妾宅を霞めて、大川の夕映に金を流すあり。

「一寸眺めが佳。若大将、帽子をち出し下さ。」

立つた儘二つの帽を欄間に懸けて、えんばねすを脱いで會釋しつゝ椅子に就く。此方も席に就きながら、いと今昔の感に堪へて、涙脆き性の目を暫叩けば、

「何ですか蠣殻町は、中野橋の手前だとか、さつれその、沖野彌三郎とした表札でも……。」

「お眺へは……。」

と横合から給仕。

「あつと……待て〜、役割番附を見てと……。」

例の輝く小指に、中等食金某と記した所を命ずる。

「え、お麥酒に致しますか。」

「若大将は？ 日本酒？ 麥酒？」

「何方もいけません。」

「大層その、野夫になりましたな……。それぢや麵包で、その、炙にし  
て。」

洋刀や匙が鳥居を造つた後、

「若大将……。」

「え。」

「どうかまあ、是までの事は御許しなすつて下さい。」

黙つて俯向いて、腕組みをきて、泣いて居る彌三郎の胸の中。

彼調造は沖野屋全盛の頃、外交を動じるもので、得意先に殊に受けよく、こ  
の人には常に注文の数を重ねるに、店でも二つとなき若い衆と持囃され、老  
主人の忠告をめでたく、はた彌三郎が幼き頃より遊び相手に、奥でも評判者  
の「調どん」であつたのが、沖野屋没落の少し前に、魔がさしてか——悪友に  
誘はれて、無断に家出し、横濱に高飛をまたとまでは風の便に聞いたところ  
ながら、その後の事は知らず。かく身形装も美しく粧ふは？

「や、出し抜けにその、お目に懸つたのですから、さぞお驚きもなさいませ  
うし、またその、さぞ御立腹でもございませうが、返す／＼私は悪い事を致  
しました。大々將のお亡りになつたのは、餘程経つてその、横須賀で新聞を  
拜見して、何てしたが、まあ、あんな御丈夫の旦那がと思ひました時は、そ  
の、私は、涙が出ましてござんすよ。あれからと申すものは、種々私をも  
の、浪人を致しまして、今ぢや、その、茅場町に居りますですが……。。」

「而してその……お宅には、女中衆ても。」

「仕舞の頃まで居たお治といふのを。」

「あ、あの眞赤な顔の、あれが勤めて居りますか。随分苛めたもんでした。」

「置かなくつても可んですが、お治の癖が悪いもんだから。」

「その事はその、幹どんから承りまして、何です。餘程その、お悪くつて  
？」

「始終ぶら／＼して居て、左様しちや、神経が強いもんだから僻んで困るんです。」

「左様ですか……。それはお困りてせうな。それでも誰か店の人で、その尋ねて参るものがありますか。」

「幹が偶に来る位のもので、皆……。兄妹を見限つて居るもんだから……。」

調造は慌て、制して、

「いえ、いえ、そんな見限るなんて、その、そんな事はありません。現在私がかうやつて今日その、お目に懸つた以上には、是まで悪い事を致しました御詫やら、御恩送やら、込み合せて、屹度是从からは世話を致しますので……。」

彌三郎は黙つて居る。此方は少し考へた後、

「而してまだ、その……。御家内は、お持ち……。」

言ひかけはまたが、その獨身である事を、幹どんから聞いた事のあるのに吞込んで、

「お渚さんとお二人ぢや、さぞお淋しいてござんせうなあ。」

「えい……。」

彌三郎は調造が、言ひかけて止めたのを、それと曉れば一層かの失戀の恨の再び想ひ出されるので。調造の方は何氣なく、

「あの頃、何てしたな、その、隣町の紫屋の娘が、お渚さん所へよく遊びに参りましたな。今でもその、参りますか……。え、あのち千夏さんは参りますか、え……。」

彌三郎は却つて無難作に、

「や、あの娘の方は度々我家へ來ます。」

「もうその、年頃で……。惣領ですからお聲様でも出來て。」

「それが、嫁に行つて歸つて來たのさ。」

「何歸つて來ました？それはその、どういふ分て……。」  
問ふ途端に梯子段に足音烈しく、がや／＼と大勢の客の上つて來るのに、餘  
義もなく話も途切る。

『十三』

兄の銀行から歸の時間を計るに、毎日の例は正四時廿三分。それがよくく  
てなければ五分と遅れた事のないのに、一つは日が詰まつた勢でもあるか、  
四十五分となつて大變暗くなつたやうな。

五時になつても足音は聞こえず、燈火が點いて六時に間もないのに、また音  
沙汰がない。

「若旦那様も遅いぢやございませぬか。今晚は珍らしいぢやございませぬ。」  
と治も珍しがれば、

「銀行で何か、開物でもあつたのだらう。」

治はその事にきて居る所へ、例の如く庭の塀の外に足音。

「そら、兄様のお歸りだよ。」

「左様でございませう。」

言ひも「らぬに格子も明いて、そこに蛇の目を立懸ける様。

「お歸んならう。」

治は開き直つて禮をするほど、彌三郎は帽子を脱つて、

「や、今日は不思議な人に遇つたものだから。」

「あや、どう誰？」

「直ぐあの、お召更をなさいますか。その儘で御飯を……。」

「や、喰べて來た。」

「御飯上つて來たのですか、兄様。」

「遣つて來たよ。まあ其方はお上り。着物は出してあれば此所で着る。」

後から着せ懸けるニタ子の羽織と供の布子に、山は入つても本博多の角帯を



締めて、長火鉢の向ふに座りながら黒セルの前垂の紐を結ぶ。  
お落は兄の顔色を見て、

「お酒を飲んで来てね、兄様。」

「何、人。私はお酒なんか飲むものか。」  
と火上に手を翳す。

「あら、だつて赤い顔をまて居るわ。ねえ、お治、赤いわねえ。」

「飲まないものが、赤くなる道理がないぢやないか。本當に飲みはまない……。」

その中にお治は洋服を疊んで、二階へと持つて行く。

「不思議な人つて、誰なの？」

お落は瘦せた頬の燈火にこけて見えるのに、小首を傾けて問ふ様。

「不思議な人さ、落ちゃん、まあ當て、御覽よ。」

「だつて知らないもの、當りの事はないてせう。」

「所が落ちゃんの知つて居る人なのさ。」

「知つて居る……人だつて、私には分りませんわ。」

「何さ、それ、店に一昨年まで居た調造さ。彼に濱町の所て遇つたのさ。」

お落はまづ眉を擡めつ、

「調造……？つて、あの、店を斷りなしに出た、若い衆の……？」

「さうさ。一時は大變評判が好かつたけれども、あんな事て飛出して。」

「横濱の方へ行つたとかなんとか……。」

「横濱ばかりぢやない、種んな所を歩き廻つたつて。」

「非道い形装でもまて居て？」

「それがさ、私の方が却つて羞かしいやうな、立派な形装をまて居て、何だか、相場師か何かになつてゐるんださうだ。」

「あの、大人しかつた調造んが、相場師なんか……？まあねえ……。店を出てから摺れたんだわねえ。」

と嘆息をまて居る妹。

「や、見上げるやうに立派な形装をまて居て、驚いたのさ。而してまあ、調造に西洋料理を御馳走になつた始末だがね。」

「え、あの西洋料理を？ 兄様が調造にも金を出して貰つて？」

「さうさ、騙られたのさ。お酒を飲め〜と言つたけれども、お酒はいけな  
いからと言ふと、野夫ぢやありませんか？ 野夫でも何でも飲め  
ないものは飲めないから、喰べるだけにまたけれども、お腹が空いてたから、  
大層喰べた。それからまあ、いろ〜話が出たので、つひ此方も牽込まれて、  
一所に居た頃の事から、店の成行の事、阿父様の事などにも移つて、此所へ  
来てから私の腕一本で遣つて居る事を話して、是から先どうか、力になつて  
くれるやうにと、よく頼んだのさ。」

「兄様……。」

「え？」

「貴方、そんな事まで仰つたのですか。」

「つかひたりと開き直つて。」

「あ、向ふも心身になつて言つてくれるもんだから、昔の馴染を想ひ出し  
て……私は涙を溢して話したのさ。」

「否な兄様だわねえ！」

極めて語氣の荒いのに驚くは兄。

「お錢がないのなら、喰べない方が可わ。」

「え、何故？」

「何故つて、兄様……。考へても御覽なさいな。そりや、西洋料理だつて  
何だつて、喰べなければ兄様一人て上つて可わ。そりや可わ、可けれど、可  
けれど……。今はそりや立派になつて居るか、相場師になつて居るか知  
らないけれど、調造は店の若い衆ぢやありませんか。此方は貧乏しても主人  
だわ。主人が店の者にお錢を出させて置いて、お腹が空いたから御馳走にな

つたの、騎られて喰べたのつて……。

「そんな事はないのだよ。」

「そんな事はないつて、現在全然言つたぢやありませんか。」

「そりや騎られたとはさう言つたけれども……。」

「だから然言つたといふんですわ。」

「初は私、断つたのさ、實は……。」

「可わ。言分は聴かないわ……。」

言ふかと思へば破れたやうに泣き出すお落の。

「どうもたんだい、おい。」

此方は身を悶えつ、

「貴方は阿父様が居なくなつて、私と二人になつて、便が少くなつたもんだから、心まで賤しくなつて……。」

「そんな……そんな……。」

「聴かないわ、もう！」

おろ／＼と聲を揚げて。

「そりや困る、さういふやうに取つてくれちや困る。何も一寸調造と夕飯をやつたから、心が賤しくなつたなんて、さう思はれちや困る。」

「困るなら、何故そんな事をまたの？」

「何故、そんな事をまたつたつて……。そりや困るね、どうも。私は……」

……僕は、そんな考へて。」

「可くつてよ。そりや兄様は、考へも何もさないで、うつかりして居たのでせうけれど、向ふには何か考へがあつて騎つたに違ないわ。而して、而して、是から先は屹度ち力になりますからなんて、そんな事を言つたに違ないわ。」

「それは然言つた。」

「そら御覽なさい。だからさうだと言ふので、向ふは今はもう先の大人しい調とんぢやありやしないわ。もう、横濱や何かを廻つて、摺れて／＼摺れ

「つ枯らしになつて居るんだわ。だからそんな、相場師やなんぞの仲間入を  
て……。い、え、さうよ。而して兄様に遇つたのを幸ひに撥まへたのは、  
屹度何か考へがあるに違ひないんだわ。もう、もう、もう、屹度さうに違ひ  
なす。」

「さう深く考へてくれちや……。」

「深く考へたつて、浅く考へたつてさうだわ、兄様。それで屹度……さう  
く、あの人は店に居る頃から、口前は甘かつた人だから、好加減な甘い言  
を言ふのに、また兄様は乗つて、それで屹度店の成行や今の事なんかまで、  
話をまたに違ひないわ。」

「そりや話に實が入つたから……。」

「だからさ仕様がな兄様だといふのよ。あんな人に話したらば、暗の耻を  
明るみへ出して、あんな口の多い人だもの、何方へ行つてまた、饒舌るか知  
れやまないぢやありませんか……。」

「あの男が、そんな……。」

「嘘よ……。兄様より私の方が、人を見る事は上手よ。」

「人を見ても僻んで見ちや……。」

「僻んでぢやないわ、本當に見るんですわ。」

「本當に見たんなら大違だ。」

「兄様、何が大違です！」

「逆顔を振上ぐるや威丈高に、兄の面を睨む眼の中。」

「や、困るなあ、又始つたねえ……。」

「又始まつたとは何です、兄様。」

「もう、知らない！」

つと立つて次の間へ出やうとする彌三郎。袂越には治が出るにも出られず。  
去るにも去り兼ねて、お猪の膳を持つた儘、立ちすくむのに行き當る。

『十四』

境 戀 矢

兄の彌三郎が意氣地なくも、元店に居た調造になんと弄ばれた事とばかり、お落は一圖に思入ば口惜しく、口惜しとよりは悲しく、悲しとよりは腹立たしくて、その腑甲斐なきを罵つても飽き足らぬ物愛さに、寐床に入つても興奮して眠られず、眠られぬまゝに泣き、泣くまゝに夜を明かして、明け方には、もう唱歌を連唱して居る聲。

「あや、そんなに遅いのかねえ。」

と吃驚して起きて顔を洗ひに椀に出れば、

「お目覚めですか。」

と湯を持つてお治が来る。

「兄様は？」

「もう貴女、疾うにお出かけてございますよ。」

「あら、今日日曜ぢやなかつたのかね。」

「日曜でござんすが、お出かけなさいました。」

「あらあら……。服してッ。」

「いへえ、お召の儘で……。」

「何所へなんだらう……。」

言つて、庭の茶山花に日の映るのを見詰めて居れば、

「貴女。あむまり御無理を仰るものぢやござんせんよ。」

その唯一言の諫が、痛くお落の胸を貫く所で。昨夜は一概に怒つて、御飯も喰はず、ふてつて、當つて、兄を困らせた事の、全躰それほど怒るべき、大切な事なのかと考へ直すと、何も久し振て途て遇つたといふ調造と、必らず一所に話をまてはならぬといふ事もなし。あの調造は子供好で、兄様とは尙更、私の少い時もよく遊ばしてくれたほどの好味のある人。遇へば兄様だつ

うやきんれつま

て懐しさに、話の盡きないのは當り前の事。自分にしてももし同じ男なら、さう有りさうな等なのを、何てまあ火のやうに つて、罪もない兄様に取つて懸つたのか。

私やこの頃どうかすると、かういふ事がある。もしや病氣の勢ではないか。あゝ、もし病氣の勢としても、兄様へ悪い事をまた。お氣の毒な事をまた。私は有るに甲斐ない病身なり、生家はあゝいふ事になつて仕舞つて、この病身を世話してくれるのは兄様の親切から。また此の後はどれほど兄様の世話にならうも知れぬものを、些細な事でも兄様を困らせた罪！ 妹の身に負ふべき罪の重さを思つて、この上は兄様の歸を待ち、心から詫をしやうものにと、繰返し／＼考へつゝ、それとも兄様はあれで怒つて、つくづく愛想を盡かして、この病身の世話をまないと仰つて、何所かへ行つても仕舞ひなすつたのぢやなからうか。

「ねえ、お治、さうまたらどうまやうねえ。」

問はれる度に、

「さうえ、若旦那様はそんな方ぢやございませんよ。現在の妹様の貴方を、お世話なさらないで、何所かへ行つても仕舞ひなさるなどと、そんな方ぢやございません。そりや、昨晚の事は、全くあの……さう申しちや何ですが、貴方がお悪うございました。ですから、貴女もさう覺召して、お詫をなさるならば、及ばすながら私も何ですから、今にもお歸りになりましたなら、直ぐとお詫をなさいませよ。」

「さうまやうねえ……。」

さるほどに世過ぎても兄は歸らず。何所へ行くとも言はないとあるに、今更ながら案じられて、お治はやさもさして又お治に聞くと、此方は笑つて、

「大丈夫でございますよ。」

自分も大丈夫だとは思ひながら、身の咎を考へる度、もしやとも疑はれて、立つたり居たりする二時半頃、がら／＼と河岸から牽込んだ車が門に止まつ

て、何やら言ふ客の聲に従ひ、車夫が、

「難有う存じます。」

こりやてつさり兄の歸りと、急いで玄關に出迎ふれば、格子を透いたる門の口、見馴れぬ年若い丸鬚の形に、短き吾妻コオトの襟に、雪の如き駱駝の頭巻した後姿、はてどういふ客かと思はるほど、彼方は車夫より、醋茶の小風呂敷包をば、緑色の手袋なりに受取て、玄關へと來る南部表の塗下駄の歩

「あら、お千夏さんね。」

「おや、お出迎へ！ 恐入るわねえ。」

かの晴々した聲に、その片唇の、懐かしげに入つて來る。

「まあ珍しい髪ね……。」

「今日は少し分があつて、お内儀さんになつて來たのよ。」

「あら誰の……。」

お浴の間は意なげながら、此方には吐胸を打つ事あり。

「おや、まあお珍しうござります事。」

とお治も出迎へて、その鬚を見る。

「否よ、お治さん、似合はないなんて言ひつこなしてすよ。」

「飛んでもない事を、貴女。」

「お治、一寸でも好から二階をお片附けな。」

「はさ〜、さう致しませう。」

お治は忠實に梯子を駆け上がる音。

「あら、兄様はお留守なの？」

『十五』

二階の八疊は彌三郎の部屋とて、南向の椽近く一貫張の机を据ゑて、その上には銀行仲間の交際俳句の書き散らしを載せ、紙片も落ちて、書も二三冊下にあるのをば、お治は丁寧に揃へて、枕時計の傍へ上げて置く。

「相變らず御遠慮のない方よ。」

襖の外に聲はきいて、主より先へお千夏の入つて来た姿は！

今コートを脱いで、紫紺の五つ紋の裾模様、襟も白羽二重の禮を正して、殊にいつもの束髪ならぬかの丸髷の品よく似合ひ、髪をふくやかに出したのに一層に媚けば、賢き口元に紅を彩りて、濃く白粉を施した面も、稍上氣して居る様に。

常にも雷ならで奇麗な方と思ひながら、お治は會てまだこのやうに美しう情装したお千夏を見た事はなく、つひ我を覺えず見惚れるので。

「何處へ入らしたの？ お落ちやん。」

「兄様ですか、一寸何處へか。」

言ひながらお落も、今日のお千夏の姿を眩ゆさうに眺めて居る。

「直お歸りてせうか。」

「はい、直に歸るとは仰つてゐましたが、お晝前から今以て……。」

と婢が引取れば、

「でも、もうお歸りになるてしよ。」

「だらうと存じます。」

「ゆつくりなさいな、可てせう。」

「はあ、少しは。」

「而して今日は何處へ入らしたの。」

と火鉢に炭を次いで居る。お治も氣を利かして茶菓を運ぶ。

「今日はね、他の商會の園遊會でね、向島の黒流園へ行つたのよ。」

「さうですか。」

「是はそのお土産。」

とかの小風呂敷を出す。

「まあ、難有う。」

「御禮では恐入るのよ。而してね、今日面白い事があつたのよ。」



と幼げにせかくして、

「今日ね、園遊會でね、先嫁つた家の人に逢つたの。」

「あの江式様で方に？」

「いゝえ、御常人ぢやないのよ。その姉つてえ人と、それから阿母様つて言つてた人。」

「姉つて、あの意地の悪いとか言つた方？」

「そりやもう、意地の悪いつたつて、一通りや二通ぢやなかつたのよ。いつだつてかお話した通りなの。」

「その方に遇つて、變だつたてせう。」

「何さ、此方は少しも變な事はありませんわ。向ふの方が變だつたてせう。だつてね、かうなの、餘興のお能があつて、是から狂言になる時、私や上せるから庭へ出て、池の所から築山へ上つたら、その阿屋の中に腰掛けて二人が、居るのよ一寸。私はあゝいふ時になると平氣なのよ。掛はず、「御機

嫌能しうござりまするか』つて言つたら、向ふは二人共妙な顔をまて、曖昧な挨拶をするの。それから私は「旦那様もお變りはございませんか』つて言つて遣つたわ。」

「然言つたらどうして？」

「したらね、『はい、無事です』と切口上か何かは可かつたけれども、そこへ逃げ出して行つちやつたわ。好い氣味だと思つて私、それからまだ手踊だの、種々な事があつただけども、ぞつともえない。それより久し振てお渚ちゃんの前へ行つて來やうと思つて、直ぐに此方へ來たのよ。」

「さう、どうも有難う。」

「といふお渚の顔を見て、

「貴女、色が悪いやうよ。又病氣がいけなかつて？」

「いゝえ、さうぢやないんですけれどねえ……。昨夜寐られなかつたからてせう。」

「どうして寐られなかつたの？」

「いゝえ、それがね、かういふ事なんですよ。」

恥とは知れど隔てのないお千夏の事ゆゑ、昨夜の大略を話して聞かせ、

「でねえ、私や是が病氣だらうと思ふのよ。先へ一つ、『さう知らず』と

疑ふ事があると、それを段々考へつめて、自分で『さうだ』と極めて仕舞ふ

の。それで『さうだ』と何所まで思ひ込んで仕舞ふもんだから、此度見たいな

事になつたのよ。でねえ、私や貴方に頼があるの。本當に悪い事をまたんて

すからねえ、兄様が怒つて居るといけなから、貴女に詫びて貰はうかと思

ふのよ。」

「あら、私が兄様にも詫びをするの。」

「否？」

「否な事は、決してありやませんけれども……生意氣だわ。却つて兄様

は御立腹よ、屹度。」

「嘘！兄様は貴女の仰る事なら何でも聴きますから、だから。」

「え？」

と聞答めて、さうも熱心に、

「兄様は、私の言ふ事なら、何でも本當に聴いて下さりませうかね。」

「え、く、本當に聴きますとも……。」

「ぢや……さう言つて上げませうか。」

「詫びをきて下さつて？まあ有難い！」

「お清ちゃん。」

「え？」

「その代り、私、一生貴女に恩を着せてよ。」

とちつとその顔を見詰めるお千夏。所へ表には聞馴れた下駄の響き。

「あら兄様が歸つて來ました。まあ私安心よ。」

『十六』

昨夜のやうな事は時折あるのて、あの場合あまり多くを言はぬ方がよく、今朝になつてもまた引續き責められては迷惑と、彌三郎は態と外して二三の友人を訪ひ、もうよい程と今歸つて見れば、門口に車の待つあり。履脱には女下駄。

「お治、お客様かえ。」

問ふを待たて、お千夏の來訪を告げ、

「まあ、早く行つてお逢ひなさいまし。そりやいつてもち奇麗な方ですけれども、今日ほどお千夏様のお美しくお成りなのを、私や拜見致した事がございませぬ。番て御紋付で、私やよいと、若旦那様の所へお興入になつたのぢやないかと思ひます。」

「何常談を言ふのだら。」

とは言ふものゝ、親しきお千夏が備装しての今日の來訪とは、珍しくもまた見たくもあり、

「二階かえ。」

「は。」

「お浴は而してどうしたえ。」

「もうすつかり御機嫌がお直りです、まあ早く入らつしやいませよ。」

彌三郎もいそぐと二階に上れば、

「今日は……。毎度お邪魔に。」

莞爾笑つて此方を迎へる艶やかなる面より、誠に今日はいつになき丸髭姿。

「珍しいぢやありませんか。」

と火鉢の傍へ来る。聞き直りながら我を羞らひ、さつと顔を朱めて、

「似合はないでございませう。」

「そんな事はありません。」

そのふくやかなる胸のあたり、細き金鎖のほの見えて。少し俯向けば匂へる眉の、己を酔はせるのではないかと想はるゝほど。

「一寸、お千夏さん、然言つて頂戴な。」

小聲に言ふを此方は頷き、まづ此程の挨拶より、先刻此方へ伺つて見ますとどうやら済まぬお顔付のお渚ちやんを咎めましたらば、これ〱のお話。病氣のさせる仕業か。自分にも分らないほどの無理を言つて、兄様を苦めた罪、私を以てお詫してこのお言葉。

「まあ貴方も、どうぞお氣に支へないやうにねえ。」

「兄様、御免なさい。ね。」

其方が折れてさういふ氣になつたらば、我には氣に支へる何の事もなし。

「お千夏さんのお言葉添もあるし、私や元から何とも思つて居ない事。渚ちやんの機嫌さへ直つたなら……。」

「さう、それぢや堪忍してあげなされるの？」

「堪忍も何もありませんのよ。」

「どうも難有う……。」

とお渚もお千夏の厚意を心から嬉しく。

「此頃は、何でござんすのね、彌三郎さんも餘程元氣がよくお成りのやうです。もう一人でお辭ぎなされる事はなしてございませう。」

彌三郎は頷いて、

「少しづつ銀行の方が忙がしうござんすし、それに友達との間に、暇には俳句をやつてるもんですから。」

「あゝさういふ事を一寸伺ひました。」

「でも、それで心を慰めるつもりでも、全躰から私は辭ぎ性に出來て居るんですね、下らない事を考へ出すと妙な氣になつて。」

「いけませんねえ……。先も來てさう申した通り、この三人は世の中から棄てられて居るもの。棄てられてるもの同士が集つて、お互に苦樂を共にし

やうぢやないかつていふのぢやありませんか。一人僻いてたつて仕様がありませんわ。」

「それが中々、お千夏さん見たいに行かないのよ。」  
と傍より。

「おや、何故一寸お落ちやん。」

「中々さう行かないのよ。兄様は兎も角も、私などは尚よ。まだこの通り本當に直つた躰ぢやなし、一生の間にもう些だつて樂の事はありはまなからうと思ふと、いつその事、私や死にたくなるんですわ。」

「あら！死にたいなんて否な事、どうしたの一寸、否だわねえ。」

「そりやお千夏さんのやうに、氣を持つて居れば間違なしだけれども、妹や私の境遇ぢや、とても僻がない分には行かなくなりませすよ。」

「彌三郎さんまでが、心細い事を仰るぢやありませんか。」

お落ちやんは病氣を柄になさるし、彌三郎さんは境遇が境遇かと仰るけれ

ども、私なんぞそれぢやどうしたものでせう。

それと判然言ふ事だけ堪忍して頂戴。實言ふと私などの場合がさうなので。

第一否な家へても一旦嫁つて来た躰でもありますし。これが女の意氣地なしさ。ねえ一寸、そりや男に産まれてるのなら、一本立にどうにてもなる事の出来るのは當前だのに、御覽なさい、私やもう嫁く事も出来ない躰。また我家に居たつても自分の我家だか何だか分りやしないのよ。

女つてもものは随分僻味の強いものだといふ事ね。それを私は知つて居るからどうかして僻まないやうにきやうと思つて、私や何でも證據を見付けて置いてから考へる性分なのよ。それが證據がもう大抵それと突止める事が出来たから、私の身はもう是限なの。

私やねえ、彼家へ嫁かない前までは、かういふ事を始終考へて居たわ。身には財産も入らない。何も入らない。けども唯一つ獲たいものは、嘘偽のな「愛」といふもの。それだつたの。けども思ふ事は……中々直ぐ叶ふもの

でもなし。その嘘偽のない「愛」を獲損じて、全て私は黽り者にされて仕舞つたんですわ。而して又歸つて見れや、財産も……いこえ、財産の事は一切私にはない事にまて居ます。

私やそれからいふもの、かういふ事を考へたのよ。何でも思ふ事は叶はない。何か妨げが起つて来て、自分を深みへ落とされるやうな場合になつて来る。あつたらぬ、深みへ落されたら、もう浮かむ瀬がありやまない。さうなつた人間ほど馬鹿々々しいものはありやしない。是位なら死んで仕舞つた方が餘程可、とまあ考へたのよ。けれどもまたよく考へ直して見ると、死ぬつていふ事がそんなに、仕易い事なのか。何ていふと、死んで仕舞ふとそれで可と考へるけれども、思つた事も叶はず、傍には妨げはある。あつてもいけなからと言つて、この世の中に産れて、何もまないて死んで仕舞つて、それで人間の役は勤まつたと言へませうか知ら。死んだらもうそれつさり。面白い事もなけりや樂みな事がありやしない。そ

れは、その代りには苦しい事も否な事も失つて可つていふてせうけれども、そんな事つてありやませせんわ。

五十年といふのが人間の相場なら、無理に早死したからつて詰まらない話。まあ、十年といふ相場があるなら、その相場に人間の命は任しておいた方が可と思ふのです。

だから私は、どんな苦しい事があつても、切ない事があつても、あつて五十年の相場があるから、うっかり命を縮める事は出来ない、熟と辛抱するの。而してその苦しませたり、切ながらせたりするのは、屹度人間の他に何かあつてする事だらう。何かなくてはそんな事はありつ事ないと思ふの。

神様が、佛様がもしあるとしたならば、さういふ貴い方が屹度上から見入らして、さういふ事を人間にさせて、苦しませたり、切ながらせたりするのだからと思ふから、又時には神佛が、人間を樂しませ、嬉しがらせたりしてくれる時もあるだらうと思ふの。だからその場合々に立つて、直ぐに私は

諦めて仕舞ふの。諦めて、いつか好い時があるだらうと思へば、つまり心が  
むしやくしやしないわね。むしやくしやしなければ、従つて氣が樂になるわ  
け。氣が樂になるから、つまり始終かうやつて香氣で居るんですわ。」

「そりやち千夏さんの氣なら、さうは諦められるのでせうけどもねえ……。  
兄様や私や、もう一生の不具も同然ですもの。」

「だから不具揃ひが一所になつて樂しみ合ふといふのは、いつだつつかの  
話ぢやありませんか。ねえ、彌三郎さん、この三人はお互に可愛がり合ひつ  
事をきやうぢやありませんか。」

「三人で可愛がりつことをするならば、兄様と私は兄妹でそれて可いけれど……。」

「お渚ちゃん、私も妹なんだから、そのつもりで可愛がつて頂戴よ。」

お渚はつくづくとち千夏の姿を見て、

「今日の形装では、ち千夏さんは兄様と御夫婦のやうだわ。」

『十七』

その日は兄妹とも楽しく語つて、ち千夏を暮々に送り出したが、彌三郎はその  
儘二階へ上れば、人氣は失つてもなほち千夏の衣の香は残つて居る。

「今日の形装では、ち千夏さんは兄様と御夫婦のやうだわ。」

元より意なく言つたお渚の言葉が、ふとその時から我が心には止まつて、

「もしやあの形装で、この彌三郎と夫婦になつたらどうであらう。」  
とふと考へる。

もしそれ太り肉なのを咎めたならば、病ある體の瘦せさらばへたのが美人の  
標準とする所か。

着馴れぬ者の中々着こなせぬ三林重ねを纏うて、いかにも麗はしう、氣高く  
見えたる今日のち千夏の姿の眼の前を去り難く、我が胸にはなほ由なくも捨  
てられたる戀の傷は愈えず、心は今に苦しき事の續けど、もし今ち千夏にし

てあの時の場合ならば如何。

その頃戀ひ慕うた人は近き石町に住んで、店と同業の商店であれば、偶然行き通うて知己となり、而かも折あつて我が戀を打明けられたれば、一度は快く承諾し、終に正式の順序を以て、結納とまで運ぶ時、運拙く我が家の没落して、縁談は終に破れ、戀は得る事の難く、それよりの我が失意。

お千夏の熱き同情を、もしかの人にして持たしたらば。否お千夏にしてもしかの娘ならまれば、どうであつたらうか。一度戀を受けて、二世を契らんとまで及びながら、榮譽を失うたる身を捨てたるかの人の情なさ。この恨は終世獨身に暮らして、いつかは晴らす時あらんと、思ひ續くる折節、こゝに世に見放たれたる姉妹に同情の念深く、孤獨なる身を構ひて厚き志を盡すお千夏の情。あゝ忘れやうとて忘らるへさ。

それでも我は何故今までに、お千夏を戀ふ心は起らなかつたか。偏に前の情なき人の上ばかりを思ひて、傍にこの美しき、清き人のあるを知らずにあつ

たか。恐しき身は由なき失戀の間に閉されて、物を辨ぶの念の鈍つてあつたか。

『兄様と御夫婦のやうだわ。』

と聞いた時のお千夏の心やいかに。辛かつたか、嬉しかつたか。はた何の心もなかつたか。

その折の彼の顔は、何故にか色をなして、あれほど世馴れたる身も、終に言葉少く、

『否なほ落ちやんねえ。』

と叫んだるのみ。もしや我へ心のあつて、迎ふる氣ではなかつたか。

己惚か何かは知らず。彌三郎は初めてその時よりお千夏を戀ひ、妹にも同情深きその人の、我が妻とならば一層の親切を妹に盡すであらうと、思ひ起せば、別れた事の堪へ難なく惜まるゝ。

今度来て逢ふ事があつたなら、いかにもして我が真心を打明かし、更に深き



同情を彼に乞はうよ。

『十八』

「今日の形装では、ち千夏さんは、兄様と御夫婦のやうだわ。」  
元よりそれはち渚が迂闊に出た言葉とは、ち千夏も知つて居る。  
知つては居るもの、沖野家から歸つて、父の前に禮をして部屋へと入り、  
着物を更へたり、なんぞする間もどうか氣懸りな言葉であるやうな心地。  
あの時私はどうして居たつけ知らと、それを考へて見る。あの時は火箸で何  
氣なく火の衣を一寸取つて居た時で、ち渚ちやんもふいとそんな事を言つて  
私の顔を見た。その時の私の顔はどうであつたらう。自分では平氣を粧つて  
居たつもりだけれども、傍から見ではどうであつたか知らん？人こそ知らぬ、  
胸は躍つて居たものを。  
けれども今日に限つて私が髪を直して、結つたからつて、それは決してわ

とした事ではなす。

今日の事は、何でも皆不意に出て居る事ばかりなんだから可笑しい。第一園  
遊會へ一人で行く事になつたのも出抜で、全躰昨日まではち萬智と行く所  
あつたから、それで沖野を誘はなかつたので、それが今朝になつて一人にな  
つたから、その時丁度店へ出て行つた時、往來を車で通つた丸鬚の人。私よ  
り少し年は上かと思えるけれども、美しい器量な奥様。あゝ好い格好な鬚と思つ  
て、それから私も久しく結はないから、一つ鬚に結つて、家内中を叱驚させ  
てやらうといふ意氣組で、どうせち萬智が結ぶ事になつて、來た髪結に結つ  
て貰つたのがこの髪。いつも束髪ばかりなのに、髪を直したので、ち萬智を  
初め皆驚いて、『行つて参ります』と父のところへも辭義しに行つた時、  
「ちや、珍らしい髪に結つたではないかの。」  
父もさすがに氣が附いた位。

それから向島へ行つて、江式の母子に遇つたといふ事も、元より知つてゝの

事ではなし、常人に遇ひこそまないが、あの人達に會つたので、忽ち沖野家の事を思ひ出し、園遊會などは人がぞろ／＼出るばかりで、面白くもないから、早くこゝを切上げて、彌敷町へ行つて遊びませうと、これも不意にその氣になつて車を走らせて来れば、思ひがけなく兄妹の仲に入る事になつて、その末が「御夫婦見たやうだ」と出し抜に言はれた事。

そりや全くは彌三郎様は久しい前から、私の胸にある人ではあるけれども、自分の氣は、少しだつて進みはしないのに、江式へなんぞ行かせて、人を翻り物にまて仕舞ふのなもの、かうなつては、いかに意があの方にあるからと言つて、公然胸に在る事を打明けられやうものか。

其所が凡人の淺ましきで、逢はぬ時はそれほどに、自から心を制して居ても、戀ふ人の前に立てば、制しやうと思ふ胸の中も、いつかは色に現れると見えて、先刻のやうな事を言はれるやうになる。

それなら私は、彌三郎様の妻たるの資格があるものか、どうだらう。

妻たるの資格！まづ家柄から言つた所で、紫屋は四代續いた堅氣な商賣に、沖野屋は一代身上で、一時に土藏の四土前も拵へたといふ分限。それも終にはあゝいふ失敗を見るやうになつたとは言ひながら、たとひ一時なりともそれほどの分限になつたのは、手もなくあの方の阿父様に器量が存つて居るからの事。次の失敗は失敗で居て失敗でない。それほど器量のあつた阿父様の子の、彌三郎様であつて見れば、今こそ零落して居たからつて、どういふ羽目に出世の緒を見出すか知れやまない。それから考へて見れば、何も現在の事考へて、必らず見棄てたものぢやない。私の未來を頼むものは、あの方と心に決したところで、よく／＼願れば自分は汚れた身。あゝこの汚れた身で、あの方の未來を頼まれやうか。

あゝ汚れた身！それを考へてはいつでも、氣は挫けて仕舞ふ。此上もない、我が胸の中にある人と頼むその方に、いつまで立つても添ふ事が出来ないならば、此世に他の樂を何に求めやう。

此世の樂！私はとても汚れた身の、胸の望は遂げられぬと知つては、まづ奇麗に諦めるとしても、その方に添はれぬとあつては仕方のない事と、さつぱり諦めれば、もう心に蟻りもなく清く暮らして行く事が出来る。とは思ひながら今日見たやうな場合になつて、『それ』と見えるといふのでは、多少とも色には出た様子。あゝまだ自分は諦めが足らないのか。諦めが足らぬ爲め、そのやうに色に出るのであるか。あゝどうしたら、さつぱりと清く諦める事が出来やうぞ。

「姉様、まだ休みてないの？」  
襖の外に聲はする。

「あや、いつの間に萬ちゃん。」

笑ては迎へながら、心身にして心身ならぬ妹の、來ずともと思ふのに、人懐く入つて來て、また何か、探りに來たらしく。

「姉様、今日面白かつて？」

と小首を傾けて、さも仇氣なげに聞く。

「はあ、一寸面白かつてよ。」

「あ天氣が好かつたから、人が出たてせう、大勢行つたてせう。」

「はあ、随分行つたわ。」

「墨流園で何處？一寸。」

その墨流園の在所まで、執濃く問はるゝには、物思ひの折から憂ふ事と。

「向島の先の方よ。」

と口早に言ふ。賢さる萬智は、忽ち何事か心に感じて、

「どうですか……。」

ともうその後を多く言はず。其方が口を利かなければ、此方も利かないで見せる。あゝ死んでも口を利かないで見せるといふやうに黙つて仕舞ふ。

あ千夏は萬智の皮肉なのに憤りはすれど、争うたとして別に榮えた事でもなし、これよりは此方も皮肉に出てやうと。

「萬ちゃん……。」

「え、何？」

「今日も店、商ひあつて？」

その問は此方の最喜ぶところで、

「不景氣よ、姉様。どうまたつてこんなとんでせう。我家のものなんかは、さう榮耀品でもないんだのに、お客様が来て来て来ないわ。職人は職人で、苦しいもんだから前借に前借にと来るのよ。仕様がなないのよ本當に。鏡部は困つて居るわ。」

「さうだらうねえ……。」

「本矢は相變らずの呑氣家だから、平氣で古道具なんか買つて居るので、心配して居るのは鏡部ばかりなのよ。」

「さう、まあ可哀想だわねえ。」

「可哀想だつて言へば、さう〜民はどうしたでせう。」

「さうね、どうまたでせうねえ。」

「どうまたでせうねえ。」

と妙な眼づかひをする。

「大方親子首でも縊つて死んだでせう。」

「あら眞逆……。」

「だつて、あんな意氣地なし……。駄目だわ、何出来るもんですか。」

「大層悪く言ふやうになつてねえ。」

「悪く言ふんぢやないわ。」

「だつて先の内とは大變、姉様違つて來たわ。」

「先の内、何て言つて私。」

「だつて先の内は、姉様、大變民の事は大騒やつて居たのぢやなくつて？民の事つて言へば、可哀想だ〜つて言つて、あの暇を出す時なんかは、可哀想だからもう少し見て、どうしても怠けるやうだつたら、出したら可だらう

なんてさう言つて、大變構つたてせう。だから言ふのよ。」

お千夏は冷かに、

「あの頃は私民と仲好だつたんですもの。」

「それぢや、今はどう？」

「今は……どうでもないわ。久しく逢ひもどうも来ないのだから、何んぼ仲好だつて疎遠になりやどうもたつて忘れて仕舞ふのが、人情ぢやないか。」

「さう、本當に久しく逢はないの？」

お千夏は正面に向き直つて、

「をかした事を言ふのね。民と逢はないのは萬ちゃんだつて知つて居るぢやないか。」

「そりや知つて居るわ。」

「知つて居るんなら、そんな可笑な事を聞かなくつても可ぢやないか。」

「だけどもね、姉様、そりや可笑な事があるのよ。」

「あー」

とお千夏は思はず眼を圓くする。

「何、可笑しい事つて……」

「可笑しい事つて、そりや本當に可笑い事よ。」

「何よ、焦らさないで教へたつて可ぢやないか、萬ちゃん。」

「焦らすんぢやないんですけれどもね……」

お萬智は矢庭に笑ひ轉けて仕舞ふ。お千夏は人焦らしなといふ事よりは、あまりに悔りがましい事をいふので、再び黙つて仕舞ふ。お萬智は少し慌て氣味に、

「姉様、それぢや話すから怒つちやうけなへつてよ。」

「あ。」

「その可笑い事つていふのはねえ。」

「その可笑い事つていふのは……」

「その可笑い事は……。」  
と笑ひ續けて、

「あの……ね。」

「あの……何よ。」

「姉様はあの民と可笑しいつてよ！」

『十九』

他の人の口からならいさ知らず、自分の最も親むべき人にして、事實は最も親んで居らぬ妹の、口より出た言葉としては是を聴けば、憤るほどに口惜しく、見ればも萬智は冷かに笑つて居る。

「一寸、萬ちゃん。」

その聲は震へて。

「私が民と可笑いつて？誰が、一寸、そんな事を言つて？」

「さへ、誰つて言ふ事はないんだけど……。」

「誰つて言ふ事もない事を、常談にも萬ちゃん言つて可と思ふの？」

「常談ぢやないのよ。常談ぢや決してないのよ……。」

「それぢや何なの？」

「本當を言へばねえ……民の阿袋が鏡部ん所へ来て、さう言つたんです。」

「民の阿袋が……」

と全く驚き呆るゝち千夏。

「さへ、かうなのよ。昨夜とか、本矢の所へあの阿袋が来たんだつて。その時本矢はいつもの夜店へか何か行つた留守だったもんだから、直ぐと鏡部の所へ行つてさう言つたんですつてよ。」

矢張いつもの泣言を並べて、どうか民をもう一度お使ひ下さる分にはなりません。すまひものでせうかつてさうのだから。而してあれからといふものは、何も

まないものだから、到頭洗濯屋の二階を出されて、今では二人木賃宿とか何  
とかに居るんだつてね。でねえ、民の阿袋が言ふんぢや、民が我家の店へ仕  
事を持つて来る時から、姉様が大變民を最負にまて居て、郷殻町からの送り  
迎へには始終自分が行つて居たから途次の話で、はつきりした事もないのだ  
けれども、是非民の阿内儀さんになりたいつて、言ふやうな事を、姉様が民  
にさう言つたのだつてよ。而してそれをまた、民が阿袋に話したもんだから  
阿袋は鏡部のところへ来て、かういふ事もありますから、どうぞもう一邊お  
店へ入れて下さいませうやうにつてさう言つて来たの。

でねえ、鏡部はあんな頑固屋でせう。だから、そんな姉様と可笑しいなんて、  
そんな事て店へ入れるやうでは第一、店の示にならないから、どうもたつて  
店へ入れる事は出来ないと言つて、断つたんだつてよ。  
だけでもねえ、眞逆姉様が、そんな馬鹿な事を、民に仰りやままい。仰り  
はままいけれども向ふは馬鹿なので、その馬鹿の言ふ事をまた、阿袋が本氣

にするもんだから、こんな事を言ひ出して来たのです。貴女からよく姉様に  
さう言つて、是からあむまりあんな者とは、お口をお利きにならない方が可  
うござらますつて、さう言つて上げて下さつてさういふのよ。  
え、姉様、一跡そんな事はあつた事？無かつた事？え……。」

「而して鏡部は何て言つて……。」

「鏡部はそれつきり何とも言つてやまなかつたわ。」

「それぢや、萬ぢやんはどう思ふの？」

「どう思ふつて、どう……。」

「私と民と可笑しつてさう事……。」

「さうね……。」

と一つ考へて、

「私は、私は……よく分らないわ。」

「で、もし、阿袋の言つた通りだつたらば、萬ちゃんはどうするぞ。さぞ笑ふだらうねえ。」

「民と何だつて事が、もし本當だつたら、え、姉様。」

「あゝ。」

「それが本當なら、笑やまないわ。」

「笑やまないけれど、阿父様に言告げるだらう。」

この一言にはさすが賢さも萬智も、胸を抉られて答へもなし。

「私やねえ、萬ちゃんに言つて置きたい事があるのよ。まあねえ、今の事に志た所でさうなのさ。私が獨いくらそれは嘘だ、作り事だと言つた所で、他の人がさうだと言へば、『さうだ』となるのが、世間普通なんだから、私は別に、その事が嘘だとも、本當だとも思はないわ。だから鏡部にもさう言つて頂戴。お前さんも通例の分別つていふものはあらうから、その分別で以て、私のこの事も辨へて見て、本當の事も嘘の事も極めておくれ。」

それからまた萬ちゃん、お前様もまた、鏡部とは仲好なんだから、よく鏡部と相談をえて、あの人が右といへば右、左といへば左といふやうにおま、而してこれはまたお前様の考へ次第で、その事を獨結にして、阿父様に言告げるともどうともおまなさい。」

「私や、阿父様になんか言告げやまないわ。」

「だから今は言告げはまさい。だけれども、もしそれと極まつたら鏡部だつて、お家の忠義者だもの、何でも阿父様と御相談をするに極まつて居るわね。さうなつた時私は、何でもその言ふ形次第に大人しくまて居るから、萬ちゃん、まあ安心して入らつちやいよ。」

お千夏は身にも多少の疚しき處あり。かの店で『一苦勞して見たい』と言つて民を弄つたる。それをお渚に話して戒められた事の、今更に身に堪へて。戀ふ人はいかに戀ふも、身の一度汚れたのをいかにせん。戀は成らず、思ひは遂げず、この上は運を天に任せんと唯黙して、黙して、密にも萬智のする



所を見て居る。

『二十』

「今日の形装では、ち千夏さんは、兄様と御夫婦のやうだわ。」  
ち千夏がその日の出立の美しく、氣高かつたのよりは、その兄に對する情と  
また己に對する情との厚いのが、殆ど心身の妹か、はた兄なる人の配偶で、  
もしありはえないかと、思ふのあまりにうかた出た言葉とは、ち渚も自ら知  
つて居る。

また年も二十の暮。美しく言つて、比べるものも少いほど美しいち千夏さん  
の、出生といひ、氣立といひ、どうでも兄の配偶には、勿躰ないほどの人と  
思へば、また兄がち千夏へ對する仕打をも考へて見るに、兄とて元よりかの  
人の憎からう筈もなし。ならうならば今宵にも銀行より歸つた時、その事を  
言出して兄を説いて見やうものごと、獨り勇んで居る折から、玄關に人の來

た様子。ち治が出て取次いだ様子。その儘に引返して來て、

「あの、段無いは婆さんなのでございしますが、紫屋の職人の母だとか申して、  
貴女にも目に懸りたいと申しますが、どう致しませう。」

紫屋ならち千夏さんの家の事。その家の職人の母とあれば、此方にも丁度  
聞きたい事のあつた時、

「あ、上げて可よ。」

と茶の間へ通す。

「へ、御免遊ばしませう。」

と入来るは、ち渚にはまだ初對面の民の母で、この十月のその頃より一層變  
れて、髪さへほうけ、見すほらしげな姿で、鬨の傍に一禮する。

「まあ、そこちやち話は何ですから、此方へも奇んなさう。」

ち治をもて火鉢を興へさせつゝ、  
「而してあの、御用といふのは？」

老母は墨に額を付けながら、

「出し抜けに伺ひまして、さぞ不躰な者とも覺召てございませうが、あの私  
は、この一月前まであの、紫屋様へ職を上げて持つて参りました、民と申し  
ますもの、母でございしますが。折入つて貴女様へも願がございまして、上り  
ましたのでございませう。」

民……とはいつぞや、此所へも千夏の来た時の話で知つて居る、あの。

「民さんと仰るのは、よく此方へも千夏様のお迎に入らした……あの方  
ですか。」

「左様でございます。あの紫屋の大きいお嬢様には、民は存じ寄りません  
御最負に與りましたのでございしますが。耻を申しませんと、理も通らないの  
で、實申上げますと、伴の民はのつそりだものてございませうから、お店の  
仕事も碌に上げないで、始終お小言ばかり頂戴致して居るのでございませう。  
その度御意見を下さるものは、あの大きいお嬢様でございませう。度々中へ入

り下すつては、既に注文を断られます所を取止めて下さりましたので、そ  
の頃は誠に何てございしましたが。是とも皆伴が恐だものてございませうか  
ら、到頭お詫も叶はなくなつて、仕舞つたのでございませう。

それはまあ、可うと致しましたところで、伴によく聞かますれば、  
そりやお嬢様の御常談でもございませう。御常談とは存じて居りますが、民  
のやうなものにお優しいお言葉を下さりまして、未は一所にならうと仰つた  
のだらうてございませう。それだものてございませうから、あのやうに馬鹿正直  
な伴の事てございませうので、それを本氣に致しまして、只今でも木賃宿に居  
りながら、仕事も致さず、そのやうな事ばかり申して、お千夏様に逢はせて  
おくれ、逢はせておくれと申します。

就きましてはもう所詮、只今となりましては、伴が店の御注文を取る事は  
とても出来ない事と、覺悟は致して居りますが、唯一度か千夏様にも目に懸  
らせましたならば、吃度息からは勉強すると申すのでございませう。丁度此方

へは度々お嬢様の入らつしやる事を承つて居りますから、今度も出がご  
いしましたら是非件を逢はせて頂くやうに、此方様へ、御迷惑とは存じなが  
ら、お願に出たのでござります。

お千夏があまりに、世に同情深く、この前の話にも聞及んだ事の、終にこゝ  
に立到つたと知れば、お渚も呆れて、老母に何と云ふ術もなくて、

「それではね、私の方へ、お千夏様がお出での折、よくさう言つて上げます  
からね。その宿といふのを教へて置いて下さいよ。」

『二十一』

明くる朝、例の二階にも千夏は獨り物思ふ所へ、輕き足音の廊下にするは誰  
ぞ。

「お映ちゃん、遊びに来てよ。」

と襖の外。此方にはまだ耳に入らず。

「大きい姉ちゃん、居ないのかね。ちんや。」

「入らつまるんでござりますよ。」

「どう。だつても返事がなすよ。」

「でもさうさうござりますませう。」

「お耳が無いの、姉ちゃん。」

一聲張上げて言ふに始めて氣の着くお千夏。

「あや、お映ちゃんね。」

「そちら入らつしやいました。」

「お入んならやう。」

つゝその前に来たお渚よりの手紙に、かの民の母の來た事を告げてあるを、  
是皆禍を我が口より出した事と諦めて、元に巻き納め、小箱に入れて置く  
時、お映は筒袖姿で現はる。

「今日は。」

ひたと園のところに辭義するに、

「あや、御丁寧ね。今日は、よく来ましたね。此方へ入らつしやい。」

「毎度伺ひましては、お悪戯を致します。」

「あら、お悪戯なさいわ。」

とお映は鼻を鳴らす。

「それぢや大人しくまで入らつしやいますか。」

頻に顔をうつゝ、

「お映ちゃん、姉ちやまのそこへ遊びに来たの。ちいや、歸つても可よ。」

「あゝ一寸、お前さん、歸つても可よ。何だか私氣が舞いて仕様のなにとこ。お映ちゃん来て丁度可わ。おちいさんお歸んなさいよ。私がお映ちゃんは遊びして、今に送つて上げますわ。」

「左様でございますか。」

「可よ、ちいや、お歸り。姉ちゃんのところに泊りするから可よ。」

「それでは、お世話を焼かしなすつちやいけませんよ。」

「あゝ。」

「では、どうぞ。」

「宜しく。」

とちいやは歸つて行く。後にお映はつかつかとお千夏の傍へ寄つて、

「遊びませう。」

「遊びませう。〜。お映様おちやん、今日は何をきて遊びませう。」

「おちい。」

としなをして考へながら、ふとお千夏の髪の變つたのに目が付く。

「姉ちやま、今日はかんくを結つたのね。」

お千夏も一寸髪に手をやつて、

「あゝ、昨日結つたのよ。重いから今日は毀して仕舞ふのよ。」

「さう。何だか阿母ちゃん見たいよ。」

「それぢやあ婆さんに見えるのね。」

「うゝ、あ婆さんぢやないの。阿母ちゃん。」

「それぢや是から姉ぢやまつて言はずに、阿母ぢやまつて御覽なす。」

「阿母ちゃんていふの、否。」

「何故阿母ちゃんていふの嫌？」

「阿母ちゃんていふと、可愛がつてくれなくなるもの。」

聞及ぶも映が母は、その次の嬰兒を慈しみて、あ映には少しも構はぬとの事。却つてその愛は父なる人に深しとあるに、彼處には子を愛せぬ親あり。我が家には姉を陥れんとする妹あり。

「さう、それぢや、矢張姉ぢやまつて言つた方が可わね。」

「姉ぢやまが可のよ。」

と甘へるやうに。

「姉ぢやまねえ、あ映ちゃんの髪を結つて頂戴な。」

「は、結つて上げませう。何に結ぶの？」

「唐人髷に。」

「宜し〜。」

立つて鏡臺を持ち來り、其處に直して塵除を取る。あ映はその前にちよこんと端坐すれば、あ千夏は櫛懸紙より出す小櫛を文つて、緋鹿の子の布で冠切を結び上げる。

「出来たわ、唐人髷。」

「さう、どうも有難う。」

と言つて髪を撫て、見ながら、

「よく出来てね。」

「さう、よく出来ましたと。姉ぢやまが結つて上げたんですものぞ。」  
己れの髪を一寸梳して、それ〜を納めやうとするれば、

「あ、鏡一寸。」

「どうするの？お映ちゃん。」

「かんくを見るの。」

鏡に映してその形を見る様。

「お洒落ねえ。」

「あらお洒落ぢやないわ……。」

子供ながら羞らはしいやうな風をまて、

「ちと寒い〜〜。」

と火の方へ寄り添ふに、お千夏は鏡臺を片附ける。

「さあ、何をきて遊びませう、姉ちゃん。」

「何でもませう。」

「寫眞屋さん、此間きたわね。」

「さう〜したわね。」

「何きて遊びませう。」

「何でも、姉ちゃんはするわ。」

「御用はないの？」

高慢ちやくれた問ひ様。

「御用なんかありやしなわ。」

「ぢや、お仕事もなしの？」

「お仕事もないのよ。」

「我家ぢや阿母ちゃん、お仕事してよ。」

「さう、誰方の衣類を縫つて？お映ちゃんの衣類出来ていゝ衣類？」

「いこえ、末ちゃんの衣類を拵へてるの。」

「さう。赤ちゃんの衣類を拵へて居るの。而してお映ちゃんは、お正月の

着物は出来たの？」

「一つ出来たの。」

「一つだけ出来たの？それつぎや？」

「後はお祝ひの時に出来るのだつてよ。」

「お祝ひはまだ中々よ。」

「だつて七つのお祝だつてよ。」

「だから七つにはまだ中々間があるぢやありませんか。」

「あら、だつて阿母ちゃんね、さう言つたわ。お正月、大人しくして居ると

すぐと七つのお祝ひが来るから、さうしたら美しい衣類を拵へて上げるつて。

だけでもね、お正月、お悪戯をしたり、暴れたりすると、七つのお祝がどん

なに早く来たつて、美しい衣類は拵へて上げないつて。だから、もう大人しく

ゑて居るわ。」

「さう、道理で大人しいのね。」

「大人しいのよ。」

その心根の哀れさよ。事は變れど、この子と我は、同じ唐侍に遇ふ者で、お

正月が来るとも囀の衣類は多く出来ぬその子と、汚れたる身になほも汚ら

はしき亡き名を負はせられ、この後の我が成行はいかにあらんかと、思ひ起

せば涙は禁じ難くて。

またそれゆゑに我が戀も叶はず、思ひを此所に残すばかりであるに、死して

も効なければまた生きてあるも効なし。願くばこのお映の如く、無心に世を

送つて、その唐侍を忍びたさを。

「姉ちゃん、何泣くの。」

その涙を見られてかと思へば、慌て、拭ひ、

「泣いてやまないわ。」

「あら、涙が出てよ。泣いたんでせう。何が悲しいの？姉ちゃんも、お正月

月に美しい衣類が出来ないの。で、泣くの？さう？泣くの？お止しなさいよう。

ねえ、泣くの、お止しなさいよう……。」

言ひながら、お千夏の面を窺ひつゝ、我も何とは覺えず悲しくなつたと見え

て、そこにわつと泣伏す。

「あら、お映ちゃん、どうしたの？」

お映は老きくり上げて、

「姉ちゃんまが泣くので、お映ちゃんも泣きたくなつたの……。」

その涙の顔を上げるのを、お千夏はしばらく涙の眼で眺めて居たが、矢庭に

お映を抱き上げて、

「あ、お映ちゃん。私を知ってくれるものは、お映ちゃんばかりだわ。」

彼の頬を我が頬に付けて、お千夏は泣いて泣いて、泣き止まず。

襖の外にはいつの間にか、お萬智の來て佇むあり。

(尾)

失戀境

明治卅六年十二月十四日印刷  
同 年十二月十七日發行

失戀境

實價金參拾五錢

著者

山岸宗

發行者

和田むつ

印刷者

佐久間衡治

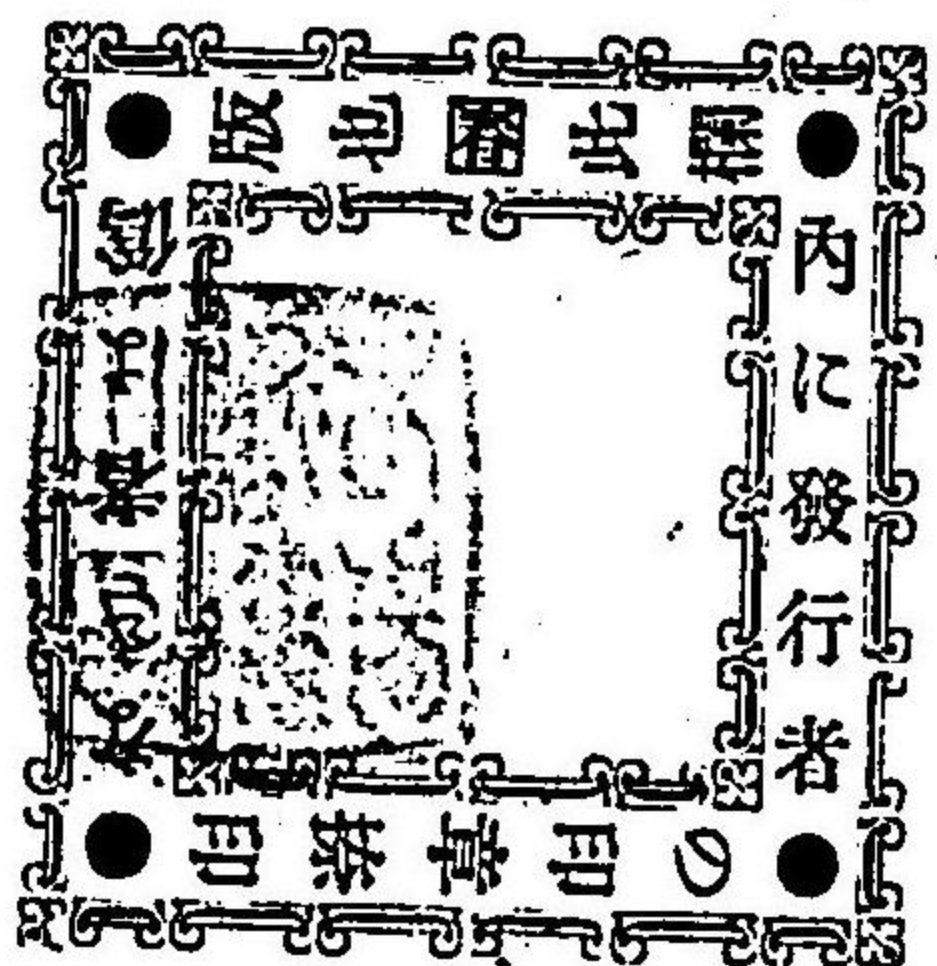
發行所

春陽堂

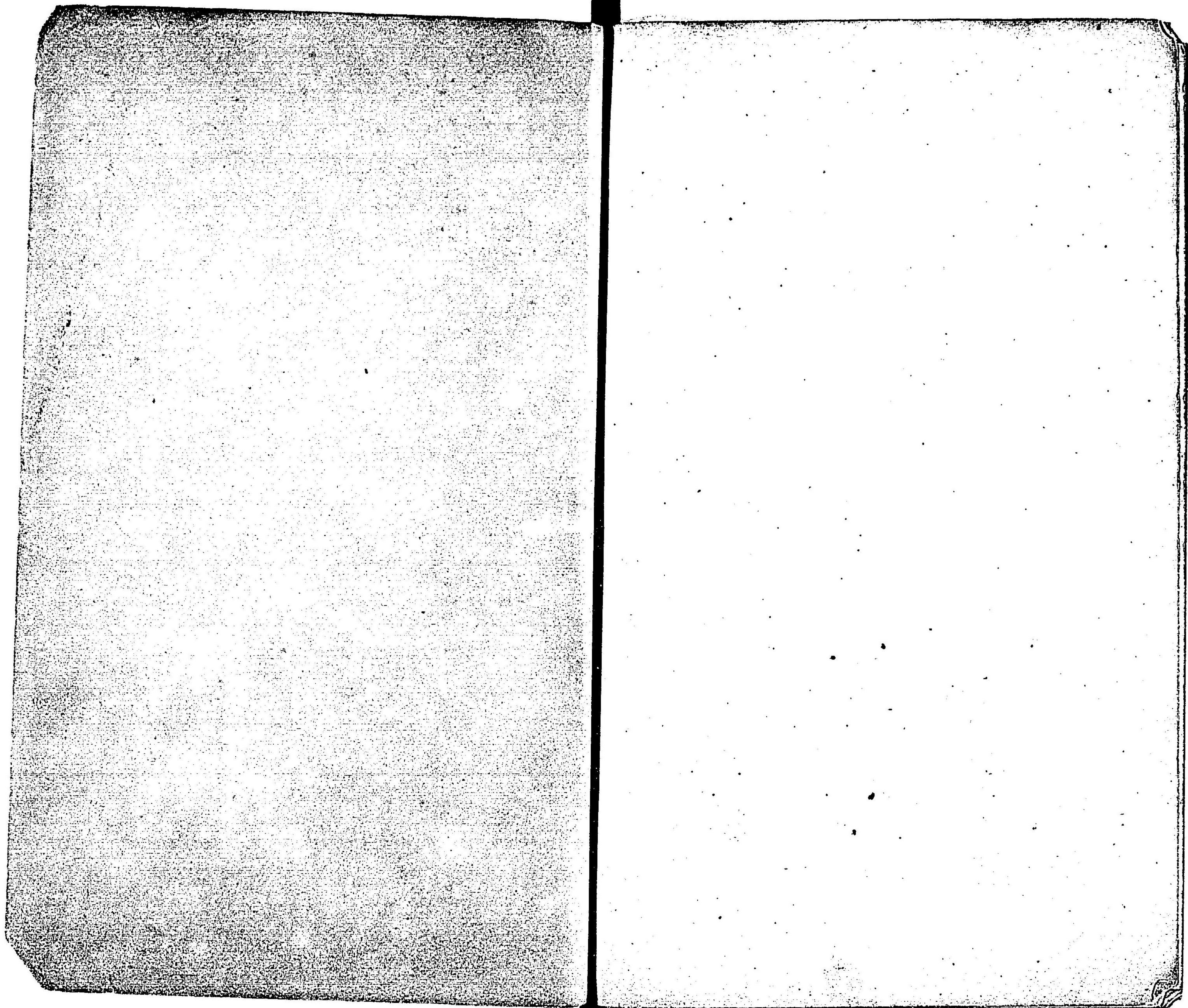
印刷所

東京市京橋區西紺屋町二十六番地  
株式會社 秀英舍  
(電話本局十八番)

東京市日本橋區通四丁目角  
電話本局五十壹番







東海叢書

093942-000-6

特9-990

失恋境

山岸 荷葉/著

M36

DBQ-1379

